
紅人の根城

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅人の根城

【Nコード】

N2138D

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

時折、身体のいずれかに『紅い痣^{あざ}』を持つ者紅人が生まれる。その者は必ず何らかの能力を有する。いつしか館が建てられた。紅人を保護し、教育する為の機関。虐げられた歴史は遠い。館の中で、一際騒々しい彼女達。果たして反省の色は見られるのか？4/23完結済み。

「罰則は誰が為？」

外は風雪。

小高い丘の上には、教会のような白く荘厳な見た目を持つ大きな館が建っている。

しかし、周囲には家屋もなく、町へと続く街路灯もない。

夜が訪れる度に、荘厳なイメージは崩れる。丘にぽつんと建つ館は、さしずめホラーハウスのようだ。

もちろん見かけだけだが。

どんよりとした重たい雲に覆われ、深い闇が辺りを包む。

枝が重みに耐え切れず雪を落とし、その音が寂しさを増していた。

静か過ぎるほど静かで異質な空間が、降りしきる雪の為に生まれていた。

時折、甲高い声を上げた風が窓を叩く。

こんな辺鄙^{へんび}な地にある館の窓にも、それぞれに暖かな灯が見える。人の気配があるにも係わらず、灯のない窓が一つ存在していた。中からは、ひっきりなしに空しい悲鳴と罵声が響いている。

「もう！ いい加減うるさいわよ」

「よくそんな口がきけるよねえ、マーシャ」

備え付けの暖炉^{だんろ}やランプに、火も入れていない真つ暗な部屋の中。マーシャと呼ばれた彼女は、呆れた声で皆をたしなめた。それに反論した少女は寒さの為に会話する声にも力が入る。

一本の蠟燭^{ろうそく}に、布団を頭から被った四人が囲う。

そう、わずかな熱や光をも逃がさないように。

その輪から外れたマーシャは、一人右手の紅い爪に、白いマニキュアを塗っている。

彼女達の隙間から、わずかに……とてもわずかに溢れ出した光を頼りに。

爪に息を優しく吹きかけながら、何度目になるだろう呆れた視線を四人に向ける。

「なによ、ラウン。私だけ悪いとでも？皆と同じ罰受けてるじゃない」

確かに「知らない人」から見たら、皆と同じ条件だと思うだろう。

壁には人災と見て取れる風穴。

厚手の布で塞いではいるが、はためている様子から役に立っている感じはしない。

蝋燭一本尽きるまで、部屋に謹慎。途中で消えたら点けなおしてもいいが、その他火気厳禁。ほぼ「外」である。

しかしながら、マーシャの服装は寒冷地において絶対的に間違っていた。

本人は嫌がったが教師&生徒達の「見ていて寒い」との反発に、渋々ながら薄手の長袖シャツを肘までたくし上げ、短パン・ロングブーツを履いている。

普段、部屋ではこの寒さでタンクトップ・短パン・ハイヒールだ。薄茶色の長い髪を、器用に大きな髪留めで下に落ちてこないようにまとめている。

寒風吹きすさぶ中、真ん中分けにし、横に流している前髪が、まるで春風を受けたかのように軽やかに揺れた。

「マママーサ……が、ああああお……ああそう……」

この中で一番幼い 年の頃をいえば、六歳くらいか おかっぱ頭の少女、スピアも布団から頭を出す。

何か言おうとしたのだが、あまりの寒さの為に口が回らず、すぐに布団を被った。

「はぁ？何言ってるのか分かりません」

分かっているからかうマーシャに、さきほどの少女ラウンが勇気を奮い立たせ、布団から顔を出す。

ショートカットの黒髪は、首元が弱点だ。勢いをつけるしかない。前髪が左右に紅く染まっているが、布団のせいでボサボサに黒髪と絡んでいる。

しかし、そんな事に気を回せるほど、この状況に余裕など皆無だ。「マーシャが、あんな遊び、考え付いた上、行動に、移すのが、悪い！ って言ってるの！」

素早く布団を被り直す。

「逆らうと、その布団ひつpegがすわよ？」

横目で見ながら声をかけると、四人とも布団を内側からしっかりと押さえたようだ。

ラウンの隣では、布団の中で呟き続ける声が漏れ始めている。

「リシュレ？」

ラウンは異常を読み取り、冬の寒さとは違う冷たさを感じ取って身震いした。

布団から出ずに、くぐもった声で名を呼んでみるが、返答はない。

「……寒さをなくするには火ですわよね？ こんなに寒いんですもの。多少の炎出すくらい、ディリアズ様だって大目にみて下さいま

すわ。でも能力禁止と言われましたし……でもでもとても寒いんですもの部屋から少し火が出るくらい　どうって事ないですわよね？　でもでもでも……」

とりあえずは理性が勝っているようだが、時間の問題かもしれない。

「そうだわ。マーシャが面白い遊びみつけた！　とか言っただけでこんな事になっとるんだわ」

「だから、やめてっば！　全部私のせいにするわけ！？」

震える声を抑え、暗く眩く褐色の肌を持った少女力نانに、マーシャが心外と声を上げる。

「皆がノった時点で、連帯責任でしょ？」

「この状態が『連帯責任』と言える？　しかも、誓って、誰も承諾しなかった」

ラウンが怒りを極力抑えて反論。

すると酷く傷ついた表情を浮かべ、

「私達、十二歳のうら若き年頃でしょ？　だったら元気がいいのは、当然じゃない！　それに寒いのは強くて、私が暗いの嫌いなもの知ってるくせに……酷いわ！　ラウン！」

「……………マーシャのが『酷い』と思う人」

ラウンの声に、半分壊れかけていたりシュレまで、手を上げた。

四人ともすぐに引つ込めたが。

蠟燭が揺らめく。やっと蠟は四分の一溶けきったくらいか。消えないように、壁に隙間を作らないよう自然と寄り添う。

蠟が終われば、この罰も終わる。

まだキーキー騒いで、自分の正当性を主張しているマーシャを無視して、ラウンはこうなった原因を思い返してみた

本日昼間の出来事だ。

まだこの頃は、うららかな陽射しがあり、幸せだった。
事件の言いだしっぺは、もちろんマーシャである。

「聞いて聞いて！授業中、すっごく面白い遊び思いついたんだけど」

「却下で」

ラウンは先も聞かずに即断した。こんな事を言い出して、まともな意見だった試しがないからだ。

「却下ですわ」

リシュレも碧眼を細め、マーシャを一瞥^{いちべつ}する。

「あゝそ〜？」

カナンが本から目を離さず気のない返事を返す。

その向かいに座り、机の上で宿題のゴーレム作りを進めていたスピアは、困った顔で断った。

「……マーシャ、あきらめてえ？」

四人が乗り気ではないにも拘らず、マーシャは話を止めない。

「まあ、そう言わずにさ〜！ でねでね？ 部屋の端に瓶を並べて、私が氷でボール作るから、それを転がして何本倒れるかで勝負が決まるの！」

「……マーシャ、パクリはよくないよお？」

「スピアに一票」

二人が同意。カナンは最初から聞いていない為、人数には入れてない。

さすがにマーシャが唇を尖らせて、

「だって、人里になんてそうそう下りられないし、これならタダじゃない？」

「これだから庶民は困りますわね。無料だなんて言葉に踊らされる私ではなくてよ？」

リシュレが胸を張り、フワフワロングの金髪を神々しく光らせて、鼻で笑う。

ただ、さんと陽の光が降り注ぐ窓際を背にしている。というだけだが。

少し踊らされかけたラウンとカナン。タダという言葉は魔物である。

「でも、踊らされなかったわけだし！」

「そうだわ！ 見本見せるとかって、勝手に氷球作って放ったのマーシャだて！」

前にきた固めの長い黒髪を、布団の中で直しながら、見えない所で怒りを燃やすカナン。

「……マーシャの、ばかあ」

くぐもった声達の意見は一致し、さすがのマーシャも、そっぽを向く。

ただでさえ暗い部屋の雰囲気は最悪だ。

「なによ。だったら実力行使してでも止めればよかったじゃない！」
張本人が、火に油を注ぐ。

「……ラウン、手伝ってえ？」
スピアが布団を引きずって、大きなダンスへ向かい、新品のコートを出した。

意図を理解したラウンは、マーシャの使用してない布団を引っ張り出す。

コートは、マーシャにも例外なく支給されている物だ。

コートも布団も必要ないから放つたらかしにしてあった物。

「……マーシャ、これ、使ってえ？」

小さなコにしては凄みのある声で差し出す。

最初は眉を顰めたマーシャも、さすがに理解した。

そう。『連帯責任』だ。

「な、なによ。騙だまされないわよ？ この部屋にいる事が罰でしょ！？」

「連帯責任だと言うなら、皆と同じだと言い張るなら、同じ格好して」

二人が詰め寄り、マーシャは唇を噛む。

この部屋にいる誰を見ても、助けてはくれないだろう。

「か、考えたんだけど！」

「却下で」

「……マーシャが、着てくれたら、聞くう」

聞く耳は持たない。

右手の爪が紅いマーシャ。

氷を作り出す事が出来、寒さにも強い。

しかし、一際暑さに弱い。

この館には「紅い印」を持つ者たちが、集められている。

「紅い印」を持つ者は、なんらかの能力を生まれ持つ。

何の力も持たない人間は、彼らの「紅い印」を「血印」と呼び、一括りに「紅人」と呼ぶ。

自分にはないモノに嫉妬し、畏怖し、差別の対象とするのだ。

昔は、産まれてすぐ殺してしまう事も少なくなかった。

他の住民に知られたら両親も迫害され、殺されかねない。
そんな時期も、確かにあった。

もちろん今では、そのような事は減少したが、ないとは言えない。
悲劇を繰り返さない為に、この館が作り出された。
そして、能力を悪しき方向へ使わないよう指導する場でもあるの
だ。

自分たちは、普通の人間である。

という事を忘れない為に。

この場にいる五人も、それぞれの能力を有する。

今は能力関係なく、腕^{かたく}ずくで事を成そうとしているが、マーシャ
は頑^{かたく}なに抵抗した。

「氷球。風穴。罰則」

ラウンは指を一本ずつ立てながら数えてやり、あからさまな作り
笑顔で、さらに詰め寄る。

「やらないってんなら、ディリアズ様に報告。あんただけ別の罰則
交渉」

「真夏に布団で簀巻きの刑はどうだん？」

カナンも布団が作り出す暗闇から、目を光らせた。

白い顔が、目に見えて白くなる。

執念深い上に、記憶力もいいカナンならやりかねないからだ。

「……分かったわよ」

ワガママ娘が、やっと折れた。

着込んだ……着込まされた途端、汗を浮かべ肌が紅潮してくる。
目に落ち着きがなくなり、悲鳴を上げた。

「あ、あとどれくらいなの!？」

マーシャの問いに誰も答える事はなく、それぞれ耐え忍びつつ、後はリシュレの言動に気をつけるのみであった。

血印^{けついん}授かりし赤子 油断するべからず 哀れむべからず
これを災厄と考えず 警戒を怠る事こそ 過ちなり

ゝかの地

よりある伝承 一部抜粋ゝ

結局、キレちゃったりリシュレが炎を撒き散らしてしまった。

いつものようにマーシャが落ち着いて消火。

その後、デイリアズ様に静かに叱られて、さらに一時間廊下で正座の刑となりました。

同室になる人間を選べないのは、すつごい理不尽だと思う。

ゝラウン

その日の日記より抜粋ゝ

く罰則は誰が為？（後書き）

ショートとはいえ、初めて話を完成させた気がします。何でも言い合える友達ってどうだろう？と思って書き出しました。私自身強くありたい、優しくありたいので、それを基本に続けていきたいです。批評などもお待ちしてますく（お手柔らかに：笑）

く清く正しくは誰が為？

前日が猛吹雪だった事など嘘のように、明るい日差しが窓から踊り来る。

すっかり芯まで凍りつきそうだったリシュレは、陽光に長く柔らかい金髪を輝かせながら、日課となっている日向ぼつこという名の、日向占領を欠かさない。

彼女の腰にある紅い痣。

幼少の頃、蒙古斑と幼馴染にからかわれて以来、誰からもひた隠しにしている。

この館に来る前のリシュレは、普段『火』を操る事が出来なかった。

もちろん我を忘れる程の状況時にのみ、強力に発動する事はあったが。

ここに来てやっと普段の状態でも、少し火を起こせるくらいまでになった。

極端に寒さに弱いのは、この為である。

「リシュレ、掃除終わらないと帰れないんだからさ。日向ぼつこしてるだけなら、外でやってよ」

ラウンが箒で、うっとりして動かないリシュレの足をつつく。

即座に振り返ったりリシュレは、物凄い形相で睨み、胸を張って見下すポーズを取った。

「やめてくださらない！？ だからラウンは、ガサツで女子力低下していると有名になるんですわ。」

私わたくしまで同じと思われたくありませんから、気をつけて下さる？」

その冷たい目と言葉に、ラウンはさすがに憤る。^{いきど}

「ちよっと！ 掃除サボってるくせに、超失礼な事言ってるじゃないよ！」

「サボるだなんて人聞きの悪い事……掃除など、女官の仕事でしょう？ 私がやる必要はありませんわ」

「言い切ってるじゃ……」

口論の最中に教室の扉が開き、眼鏡をした長身の男がゆっくりと入ってくる。

ディリアズ 二級先導士。

紅人の中でも、この人あり。

と言われるくらいの人物だが、二級止まりである理由は語られない。

もちろんその理由を知っている人間もいるのだが、その話になると誰もが口を重く閉ざしてしまう。

色んな噂の元にもなるが、最終的に誰しもが思い、納得するにいたることは、

今のクラスを受け持ったばかりに……

という、哀れみだった。

ともかく、それに関してディリアズが否定も肯定もするわけではない為、深く詮索するものは少ない。

ディリアズは、まだ教室に残っている二人に微笑みかけた。

「ラウンさん、リシュレさん。お掃除ご苦労様です」

「ディアリズ様！！ お忘れ物でも！？」

ラウンが、切り揃えた黒い前髪を揺らして駆け寄った。

左右に二束、紅い髪が生えており、それも同様に揺れている。

「……触角^{しゅっかく}が、嬉しそうですわね」

リシュレの呟いた声など聞く耳もたず、箒を胸の前で握り締め、女の子のように（女の子なのだが）キラキラとディリアズを見つめるラウン。

ディリアズも眼鏡^{めがね}ごしに、紫の瞳が柔らかくラウンに微笑んだ。

「いえ。ちゃんとやってくれている様ですね。助かります」

「えゝそんな！ 当番ですしい、やって当然です！」

ラウンは普段では有り得ない猫なで声で、ディリアズにアピールする。

そうですか。の一言が返ってくるだけであつたが、ラウンはそれだけでも嬉しいらしく、小躍りしながら箒を操った。

「ディリアズ様。提案があるのですけれど、今よろしいでしょうか」

「ええ、ではここに」

そんなラウンを見ぬ振りして、リシュレは真剣な面持ちで声をかける。

ディリアズは日向に椅子を置いてやり、リシュレを座らせた。

正面に自分も椅子を置き座ると、話を聞く体勢を整える。

「はつきり言わせていただきますわ。何故、女官を雇わないのです？ 腑に落ちません」

単刀直入に言うリシュレに、ディリアズはゆっくりと口を開く。

「そうですね。資金の関係が大きいのもありますが、それよりも…

…」

「それならば、私のお父様に用立てればいいのですわ！」

話の途中で割り込み、強い口調で言うリシュレに対して、ディリアズが左手の人差し指を立て、リシュレの口の前に持っていく。

それを見たラウンが嫉妬の炎を燃え上がらせた。が、二人とも意に介さない。

「いいですか？ リシュレさん。ここでは貴女あなたのお父様でも、口出しは出来ませんし、させません」

それがどういう事か、お分かりですか？と、静かにリシュレに問う。

リシュレは少し考えて、館の規則を読み上げるように口にした。

「自立する事を目標に、個性と規律を重んじる場所だから。ですから」

「そうですね、館に入る上での規則です。では『自立』とは何だと思っていますか？」

リシュレの言葉にうなずき、眼鏡の奥で紫の瞳が、問うようにリシュレを見つめる。

さらに質問をされ、一瞬怪訝な表情を浮かべたが、慎重に言葉を探しリシュレは口を開いた。

「あの……独り立ちする事ですわ」

「正しいですが、完璧な答えではありませんね」

その言葉を聞き、下を向いてしまったリシュレに、ディリアズが優しい口調で続ける。

「いいですか？ もちろん独り立ちが目標ではありますが、

ここでの『自立』とは、他からの支配や助力を受ける事なく、存在できる者の事を指します。それを学ぶ為に、貴女はここにいますの

です」

唇を噛み、リシュレはそれでも食い下がる。

「この館自体、私のお父様の援助が大きいのでしょうか？　でしたら、お手伝いを雇うくらい、どうという事はないのではなくて？」

「リシュレさん。それは間違っていますよ」

眼鏡の奥の目が、キラリと光った気がした。

ディリアズから目を離していなかったラウンは、それに気づいて後ずさる。

眼鏡を中指で一度押さえ、リシュレへと向けた目は普段と違わないモノであった。

ラウンは見なかったフリをして、ふと思い出したように掃除を始める。

「貴女のお父様は、確かに出資して下さっています。

しかしながら、紅人と呼ばれている私達を快く思っていない人達
が、

未だ大勢いるのです」

真剣な顔で、諭すように話す。

「出資しているとはいえ、一個人としてではなく一国の予算です。

如何にお父様といえど、軽々しく上乘せをするわけにはいきませ
ん。

汗を流して働いている国民からの『税金』から賄っているわけ
ですからね」

「いいえ。私から頼めば、きっと出してくれますわ」

……あの親なら、やりそうだ！

思わず手を止めたラウンが、心の中で呟く。

おそらく、ディリアズもそう感じたに違いないが、顔には出ていない。

根気良く話を続ける。

「リシュレさん。先程の規則の意味をよく考えてみなさい。

国民は皆、自分の事は余程の事がない限り、自分でやらなければなりません。

それは、この館でも同じです。

ここは貴女の学び舎でもあり、家でもあります。
いいですか？

自分から進んで出来るようになる事が、貴女の当分の目標とします」

この館では秘密とされているが、

誰からも理不尽な暴力を受ける事もなく。

誰からも好奇の目に晒^{さら}される事もなく。

紅人として生まれ何不自由なく暮らしていた国王の娘。

一番辛い時期を越えてきているディリアズは、

彼女に、ここにいる意味を理解させたかった。

「でも理不尽ですわ！」

ワガママ娘は後に引かない。

「理に適ってると思っけど？」

ラウンの言葉に、睨み付けるリシュレ。

「ラウンに私の気持ちなんて分かりませんわ！」

「うん。分からない」

あっさりと肯定する。

ディリアズは、会話に入ってきたラウンに、耳を傾けた。

止めに入らないディリアズの様子を伺いながらも、ラウンは話を続ける。

「だって、ただ自分が楽しただけじゃん。

何もしないで、物なんか出来ないし出てこない。

今までここで何をしてたのさ？

自分でしなきゃいけない事が五万とあるのには気づいたでしょ？」

「そ、それは……そうですね」

「自分で着替える事だってそう。

自分の食器を運んで、ゴハンを取りに行かなきゃ食べられない。

そのゴハンだって、順番が来たら作らなきゃいけない」

指を一本ずつ立ててやる。

リシュレは、苦い顔をして反論した。

「ですからプロを雇えば、給仕もしてくれて美味しい物が食べられるじゃない」

それを聞き、ラウンは立てた指を四本に増やす。

「紅人でない人なんて、来るわけないじゃん。

第一、紅人で料理人のライセンスなんて取れるわけがないし」

「私の城では、何人もの人を雇ってますわよ？」

言うべきか一瞬悩む。

ディリアズに視線を送ったが、彼は静観を決めたようだった。

ラウンは小さく溜息を吐き、^{のち}掌を見せるように、リシュレに突き出す。

「リシュレの城じゃなくて、国王の城。

雇ってるのはあんたじゃなくて、お父さんでしょ？」

お父さんがいなきゃ、紅人であるリシュレなんて追い出されておかしくない」

ラウンの言葉に、さすがにリシュレは顔を赤くして激昂した。

「なんて、なんて失礼な！」

「失礼な話じゃないよ！ リシュレは守られてて良かったね。

って話だよ」

言葉の雰囲気が変わり、リシュレは怪訝な顔をする。

自分を伺っている様子を感じ取り、ラウンは慎重に言葉を紡ぐ。

「いい？ リシュレは、赤ん坊の頃から『普通の人』として育てられた。

もちろん王族として。国王という権力のおかげでね。

でもね、あんたのいう庶民が『紅人』を産むと、

今まで仲良くしていた町の人達に、両親共に殺される事だって少なくなないんだよ」

リシュレは押し黙る。

「リシュレのお父さんが……例えば不幸があつたとしたら、

今まで愛想良くしてた『お城の人達』はどうすると思う？」

「……きつと、変わりませんわ」

「でも、変わったら？ リシュレは追い出される。

『紅人』として、町に置き去りにされた時の『庶民』の反応は？

小さな頃からの親友でさえ殺しにくるのに、

知りもしない『庶民』の中で、どれだけ生きていけると思っの？」

リシュレは葛藤していた。

自分を落ちぶれさせ、その上、身内をも侮辱させる想像を許せなかった。

でも、ラウンの話も嘘とは思えないほどの重みがある。

「そこまで」

今まで聞いていたディリアズは、一つ手を打った。
はっとして、二人は振り返る。

「リシュレさん。『紅人』を認めない人間は、確かに滅つては来
います。」

しかしながら、まだその人口の方が多いのも確かです。
いついかなる時にも、自分で生きていけるようになる為に『館』
が作られ、

どんな事にも応えられるよう、私達がいるのですよ」

リシュレはうなだれて、先導士の話を大人しく聞く。

自分がそのような立場にいる事に、初めて気がついたのだ。

しかし、王族として育ったプライドも捨てられない。

ディリアズはリシュレの手を取り、優しく話す。

ラウンの顔が引きつったのは、言うまでもないが。

「ラウンさんの話で、そのような人間もいるのだと分かったなら、
先程言った、貴女の目標をよく考えて行動しなさい。

自分から進んで出来るようになる事が、当分の目標ですよ」

「……分かりました。善処致します」

その言葉を聞いて頷き、ディリアズが立ち上がる。

「さて、長くなってしまいましたね。

ラウンさん、お掃除が終わったら、

日暮れまでに畑に来てくれるよう、フェイ先導士が呼びでした
よ」

「ありがとうございます！ ディリアズ様」

ディリアズが出て行き扉を閉めた。
ラウンはすぐさまリシュレの手を掴^{つか}む。

「いたっ！ な、何をするんですの！？」

「一人だけ、手を繋ぐだなんて卑怯だわ！ 分けなさいよ！」
凄^{しみ}い形相で手を掴むラウンに、リシュレの腰が引ける。

なんとか離してもらおうと、腕から振るが、埒^{らち}があかない。
「リシュレにディリアズ様は、渡さないんだから！」
別に誰のモノでもないのだが、ラウンは頑として離さない。

「尊敬はするけど、それ以外の気持ちはない」

と、リシュレはなんとかラウンに聞き入れてもらい、手は離して貰^{もら}えた。

それよりも、ラウンに聞いておきたい事があった。

「……聞きたい事がありますわ」

真剣な声で尋ねるリシュレに、今度はラウンが首をかしげる。

「さきほどの話。……その。ラウンの事、ですの？」

言いづらそうに聞くリシュレに、ラウンは軽く首を振った。

「いや。お父さんから聞いた話」

「では、お父様のご両親が……？」

ちよつと不審な様子で聞き返す。

「まだ、故郷でピンピンしてるよ」

眉間に手を当てて、なにやら独り言を始めるリシュレ。

さして気にも留めずにラウンは、箒を差し出す。

「なんですかの？」

それに気づき、リシュレは首をかしげた。
ラウンが集めたゴミを指差す。後はチリトリで集めて捨てるだけ
なのだ。

「掃除だよ。後は捨てるだけだからさ。」

「少しずつでも、自分で出来る事増やしていこうよ」

沈黙がおりた。

「……リシュレ？」

「善処しますとは言いましたが、今日からとは言ってませんわ」

遠くで楽しそうに笑う声が聞こえる。

「ん？ ちょっとよく聞こえなかったな」

「もうお掃除終わりでしょう？ですから次回から致しますわ」

何かが切れる音がした。

「い・い・か・ら！ 掃除しろって言うてんの！」

「捨てるだけでしたら、ラウンがやればいいでしょう」

「いますぐ善処しなさいよ！！」

箒をリシュレに押し付ける。

それを押し返しながら、リシュレが叫んだ。

「これこそ適切な対応だと思えますわ！

私を騙したくせに、よくそんな口が利けますわね！」

「騙しただなんて人聞きが悪い！」

聞いた話をリシュレ版に脚色しただけじゃんか！」

お互い、怒り心頭。大喧嘩が始まる。

教室からは出たデイリアズは、扉の外で話の流れを聞いていた。
ラウンの捨て台詞を聞いて、静かに苦笑した。

「脚色ではありませんよ。ラウンさん」

喧嘩を止めることもなく、そっと教室から離れ、畑へと足を向けた。

フェイに、ラウンは来られないと報告する為に。

騙された上に、ご飯抜きだなんて！

絶対に、理不尽ですわ！！

く
リ
シ
ユ
レ
そ

の日の日記より〜

く清く正しくは誰が為？（後書き）

あとがき。

読みにくさの改善に努めてみましたが、空回ってしまった感もあり。

世界観を強く出したかったのですが、気がついたら今回も『能力』使っていないですね…おかしいなw

「嘘をつくのは誰が為？」

「ちょっと！ 聞いて聞いて！」

勢い良く教室に飛び込んで来た少女マーシャ。

しかし、五人クラスの教室には二人しかおらず、疑問を投げかけられるどころか、誰も振り向かない。

それはまるで、

「見ちゃいけませんよ！」

と親が子の手を引っ張って行くくらいの冷たさだ。いや、これよりも酷いかもしれない。

なにしろ、まったくの反応すら示さないのだから。

「ちょっと？ あからさまな無視って、どうなのよ？」

相変わらず本を読みふけているカナンには、

近づいて声をかけたら、空返事くらいは返ってきた。

スピアも同様だ。

能力別にある物体操術の授業で出た、宿題の砂ゴーレムが出来ずに、集中している。

「あれ、あの二人がいらないじゃない。

イヤ〜ね〜！ せっかく聞き耳情報ゲットしてきたのに」

大袈裟に溜息を吐いて、二人にもアピールする。

スピアの集中が途切れ、左右に揺れていた砂山が動かなくなった。

「……マーシャ。うるさい」

「あ！ スピア〜。イ・イ・コ・ト、知りたくない？」

声をかけた瞬間に、スピアの近くに来て、猫撫で声を出す。

スピアは何かを言いかけたが、諦めた。
袋に砂を丁寧^{ていねい}に詰め、ポケットにしまう。

どんな状態であれ、声をかけたのは失敗だった。
スピアは、一つ学習した！

などと、カナンが心の中で何かしらの音楽を奏^{かな}でながら、
心の中でガッツポーズを取った事など、分かりもしないだろうが。
ともかくも、スピアは小さく息を吐き、仕方なくマーシャを見る。

マーシャは、その様子に満足したように満面の笑みを浮かべた。
彼女が口を開く前に、スピアが疑問をぶつける。

「……マーシャ。『聞き耳』って言い方、間違ってない？」

「何言ってるのよ！ 先導土室の扉越しに聞いたんだから、間違っ
てないわよ」

ちゃんと耳を凝らして立ち聞きしたのだ。
間違ってるわけがない！

そう、間違っではないだろう。
話を持ってきたのが、マーシャである以上、
おそらく聞く値打ちのある内容であるはずがない。

けっして『耳寄りな話』ではないのなら、『聞き耳情報』で十分
だ。

という見解のもと。カナンは無言を貫く。
「……そっか」
あっさり頷いてしまったスピア。
さらにマーシャが近づく。

「でね？ でね？ なんと……」

「おい！ デイリアス様からの伝言だよ！
明日は氷結祭だひょうけつさいって。

参加しない人は、あたしに言ってね」

ラウンがリシュレと教室に入って来ながら、集まっていた皆に声をかけた。

マーシャの動きが固まる。

ゆっくりと。

ことさらゆっくりと振り返るマーシャを、スピアは肩を竦すくめて見送った。

「ラ～ウン～！？」

「なによ」

恨みがましい声で非難される意味が分からないラウン。

とりあえず、また何かしでかそうとしたのを、

自分が『邪魔』したのだろう事は、間違いなさそうなので、無視して続ける。

「不参加は講堂に集まって『礼法』の授業だって。

なんとなんと、デイリアス様が担当！ だから、あたしは『不参加』決定ね」

「……ラウン、不参加なの？」

スピアが目を丸くして、心細く呟く。

その声に、幾分申し訳なさそうな顔をしてスピアの傍に寄った。
頭を撫なでてやりながらも、決意は変わらない。

「ごめんね？ デイリアス様の婚約者として、ここは参加しとかな
いと」

しおれた様に、うつむいてしまったスピア。

リシュレは呆れた声で、訂正を入れておく。

「婚約者って？ 相手にもされてませんのに、言え言つほど悲しいですわね」

「言霊ことだまって言う言葉知らないの！？

言えは本当になるんだよね〜カナン」

結局、本に集中出来なくなったカナンは、諦めて本を置いた。

「あゝ、故郷くにの古い言い伝えではそうだわ。言葉通りの結果を現す力があるってヤツ」

「あからさまに、胡散臭うさんくさい話ですわね」

可哀想な者を見る目を、ラウンに向ける。

カナンも、困ったように首をかしげながら同意した。

「まあ仕方ないわ。病は気からとも言うで、自分を明るく保てるならいい」

多少突き放した言い方だが、ラウンは聞き流す。

持っていたチェック用紙で、マーシャとスピアの名前に丸を付けた。

「じゃあ参加は、マーシャ。スピアという事でいいね？」

「……ラウン。スピアも不参加がいい」

その言葉に、皆 特にマーシャが激しく動揺した。

自分の作った氷の彫像を、スピアの力で動かそうと思っていたのだ。

「は、反対！ 反対！ 『氷』と『物体操術』の人は強制参加ですよー！？」

「スピア？ どうしただん、スピアらしくない」

幼くとも自分の力を試せる場面で、断る事をした事がない。
そんなスピアは、小さい声で続ける。

「……だって。ずっと宿題やってるのに、出来ないもん」

たしかに、この所『砂』と格闘していた。

その事で悩んでいる事も、周知の事実。

「そんなの期限が決まってるんだから。放つといいじゃない
い！」

マーシャの言葉に、うつむいてしまうスピア。

ラウンは、とりあえずチェック用紙をカナンに預け、
二人のコートを取り、教室からスピアを連れ出した。

声も出さず、涙をボロボロ流すスピアに、ラウンが空を仰ぐ。

廊下ですれ違う人皆に、

「ラウンが、ちっさいのを泣かせた」

と、言われまくったが、今回は無視を貫く。

右耳の裏に痣を持つスピアは、館に来た当初まったく話す事もなく、

今でも話し出すまでにタイムラグがあるくらいだ。

育った環境もあるのだろうが、その件に関して言わないから聞かない。

聞かれたくない事なんて、この館に住む者には山ほどあるから。
そして彼女は、館に来た時から一度も泣いたことがない。

それなのに大粒の涙を零しているのだ。

ここまで我慢していたのには理由があるはず。

ラウンは、こんなになるまで聞かなかった自分に毒づいていた。

いくら聞かれたくない事柄だったろうが、聞き出すべきだった。

二人で裏の畑に着く頃には、だいぶ落ち着いてきたスピア。手袋を忘れたラウンは、腕組みしながら尋ねる。

「宿題。そんなに悔しい？」

本題を切り出されて、スピアはうろたえたが、やがてポツリポツリと喋り出す。

「……。分らないの。」

宿題発表の集まりで、水を足して成功させたロニーも合格じゃなかったの」

でも、砂だけじゃ出来ないの。

と、また目を潤ませる。

才能がある分、今までトントン拍子に事が進んでいたばかりに、壁の大きさに戸惑っているのだろう。

ラウンも、少し考えてから、

「それだけじゃないんじゃない？」

頭の片隅に何か引っかけた気がして、その言葉を選んだのだが

スピアの表情が強ばったのを見て確信する。

「……ラウン。何で分かるの？」

硬い声に、ラウンはバツが悪そうに頬を掻いた。

「いや、いつも動物と付き合ってるからかな？」

なんとなく『いつもと違う部分』があると分かっちゃうんだよね」

「……そうだったね」

別にラウンが、人の心を読むわけではない。

彼女の能力は『動物と会話』が出来る事だ。

動物達は、口だけで喋るわけではなく全身を使う。

細かい動きを見極められる能力が、本当の能力なのだろう。

なので、畑での鳥・モグラの説得などを頼まれるのは日常だ。

しかし操る事が出来るわけではないので、交渉失敗もままある。

虫は嫌いだから、言葉が分かっても決して話さない。

害虫駆除は人力でお願いしている。

「……あのね。ロニーがスピアの砂を机から落とすの」

少し考えながら、話始めた。

その内容として、

いつも一番だったスピアが苦戦しているのをいい事に、不合格ではあったが、先に出来たロニーが調子に乗った。

という所だろうか。

少しばかり、라운ンの脚色もあるが遠くはない。

それからというものの、何かにつけ、

スピアの髪の毛を引っ張る。砂を落とす。

座ろうとした椅子を下げられて、お尻を強く打った。

手が滑ったと水をかけられる。

などなど、話を聞いた라운ンは心の中のブラックリストに、

ロニーの名を刻んだ。

「許すまじ！ ロニー。ご飯にドブネズミをダイブさせてやる！」

気になる人間へのちよつかいだって限度がある。

ここは分かせてやらなければならぬ。

怒りの炎を吹き上げているラウンに、スピアが冷や汗を流す。

「……ラウン。いいの。言ったら気が楽になったから」

「いいや。ここはおねーさんに任せなさい」

言っても聞かないラウンに、スピアはボツリと呟いた。

「……じゃあ、今度から誰にも、何も言わない」

少し気まずい空気が流れ、ラウンは失敗したとを感じる。

「分かったよ。冗談！ 冗談だから、一人で抱え込まないで？」

「……ううん。やっぱり、こういう話は心配かけちゃうから。」

もう、しない」

頑^{かたく}なに、まっすぐラウンを見つめる。

ラウンは、少し力を込めてスピアの両肩を掴み、顔を近づける。

「ホントごめん。でも、聞いて？」

普通にしているつもりでも、分かるもんなんだよ？

あたしだからじゃなくて、本当は皆も気付いてる。

きつと聞いてもスピアは絶対喋らないし、無理に笑顔を作っちゃ
うから。

その方が心配なんだよ。こっちも辛くなるんだよ。

愚痴^{ぐち}でもなんでも喋ってくれた方が、実は嬉しいんだよ。

皆で解決出来るかもしれないじゃん？」

閉じかけている心の扉を、なんとかこじ開けようとする。

スピアは話を聞きながら、笑顔を作ろうとしていた。

あたし達が、信用されてないみたいじゃん。

という言葉は言わなかった。そんな事はどうだっていい事だ。
なにより自分はスピアを信じている。

スピアは、ただ心配をかけたくなかっただけなのだ。
確かに、自分がされた事を話せば、一緒に怒ってくれるだろう。
でも、自分のせいで他人を憎む皆を見たくなかった。
皆に悲しい思いをさせたくなかった。

いつだって笑っていて欲しかったから。
いつものように皆で大騒ぎしてて欲しかったから。

またポロポロと大粒の涙が零れ落ちた。
ラウンは、抱きしめてやりながら、頭を撫でてやる。

「頑張ったね。我慢してたんだもんね。
一人じゃ寂しいよ。あたしでも寂しいよ。
皆がいるよ？ 誰がなんと言っても、私だけは絶対に味方だから
ね。
忘れないでね」

「……ぜったい？」
泣きじゃくりながら、口を開く。
「絶対だよ！ おねーさんが『嘘』言ったことなんてあった？」
ニヤツといたずらっぽく笑って見せると、
涙でベシヨベシヨになりながらも、スピアはクスリと笑う。
「……いつだって、適当な事ばかりだよ」
「えー！ ラウンシヨック！ いつだって大真面目なのに」

大袈裟に驚いて見せたその劇調の態度に、スピアは声を出して笑った。

「おゝ、やつと普通に笑えたね」

「……ラウン、ありがとう」

コートの裾で涙を拭ってやり、ハンカチがない事を詫^わびた。

「ありがとうついでに、思いついた事があるから。ちょっと待ってて？」

と、半分雪に埋もれているスコップを手に取り、辺りを見回してから雪をどけていく。

スピアは、不思議そうな顔でその様子を眺めた。

掘り当てた地面には、なにやらこんもりしている。丁寧に地面を掘ると、小さな空洞が現れた。そこに口を近付け、

「おゝい！ ちょっと？」

と人間の言葉で普通に呼びかけると、しばらくしてモグラが顔を出す。

「……意外と、カワイイんだね」

ラウンの後ろから覗いて、息を呑むスピア。

恐る恐るな態度のスピアに、少し笑って手を差し出す。

「スピア、宿題の砂、持ってない？」

「……？ あるけど、どうするの？」

「いいからいいから」

少量を手に取り、モグラの前に持っていく。モグラは鼻を細かく動かして、砂に触れた。ラウンがなにやら頷いたり、首をかしげたりしている。

そして砂は袋に戻され、ラウンは振り返った。

「スピア。一つ聞かせて？ ロニーが不合格だった理由って何？」

「……え、と。これだけじゃ足りないって」

「水をかけるだけじゃ足りない。って事だよね？」

スピアは上を向き、先導士の言葉を反芻し、
ラウンの言葉が正しい事を確信して頷いた。

「モグラがね？ この砂は西の方にある砂に似てて、吸水性が高い
んだって。

水を含むと固まる性質がある」

ラウンの言葉に、スピアは目を丸くする。

気付いたのだ。

ロニーの答えには、理由が足らなかった。

この砂に関する知識も必要だったに違いない。

「……西の方。調べなきゃ！ 本当ありがとう、ラウン」

目を輝かせて、館内へと走っていくスピア。

ラウンは見えなくなるまで見送り、一息ついた。

モグラに持っていた木の実をあげ、礼を言う。

「ラウン！」

カナンの声に振り返る。

隠れて見てたのだろう、皆心配だったのだ。

「やっぱり来たんだ」

ラウンは笑いながら、館内に駆け込むと真っ赤になった手をリシ
ユレに当てる。

誰よりも温かい。

「やめてくださらない！？ 苦手と知った上での行動は罪悪ですわ
よ！」

リシュレは悲鳴をあげるように叫び、ラウンの手が素早く振り払われる。

心地よい時間は長続きしないものだ。

「スピアがさつき私達に『ありがとう』って言ったわよ？
という事は、もちろんうまくいったんでしょ？」

マーシャが詰め寄り、ラウンは一步後ずさる。

「大丈夫だよ。それよりも、ロニーって知らない？」

「ああ、オーレリア様のクラスでスピアと同じ物体操作の……」

三人とも、目の色が変わる。

悩みの原因に気付いたのだ。

「でも聞いて。スピアは報復を望んでない。

バレたらスピアに嫌われる」

ラウンが指を一本ずつ立てていく。

二本の指を掴んで、カナンが微笑んだ。

「バレなきゃいいんだわ」

マーシャも、大きく頷きながら、

「当然よ！ やられたらやり返す。基本よね」

「一人の罪は、教室の罪でしたわよね？ 連帯責任が基本ですもの」

皆が指に止まった。

力強すぎて、痛いんですけど。ってのは黙っておいたが。

「連帯責任！」

『どんどん！』

わけの分からない掛け声とともに、結束は固まった。
計画は秘密裏に進んでいく。

スピアの宿題は、西の地域を調べ上げたおかげで、大成功を遂げた。

やはり、扱う物質の知識が必要だったらしい。

そのお祝いに、氷結祭には全員で参加する事に決めた。

「いいわね。明日は計画通り、あっちの邪魔しまくるわよ」

『どんとこーい！』

四人は小さい声で再チェックを行い、万全の体制を整えた。

ラウンから受け取ったチェック用紙を見て、ディリアズは不審に思う。

火のリシュレが参加など、どんな理由があってもあり得ないからだ。

思い当たる節はある。

「スピアさんの件か」

物体操術は、ディリアズが担当している。

ロニーのあからさまな嫌がらせに、直接指導したのだ。この件に関しては終わっている。

「いや、あの子達にとって終わってはいないのか」

ディリアズは席を立ち、廊下を伺う。

そそくさと出て行ったラウンとカナンの背中には、まだ見えている。

「ラウンさん、カナンさん。こちらへ」

まさか声をかけられるとは思わなかった二人は瞬間、目で合図しあった。

そんな事が分からないディリアズでもなかったが、

とりあえずディリアズに与えられている先導士室へと促す。

扉を閉め、ディリアズが椅子に座った。

居心地の悪そうにしている二人を見つめ、口を開く。

「何を隠しているのですか？」

直球で来た質問に、ラウンは普通にすることを努めたのだが、拳動不審は否めない。

「何の事ですか？」

すぐさま疑問に疑問で返すカナン。

一応先導士の前では、標準語を使っているのは礼儀を考えたのだろつ。

ポーカーフェイスは最高の出来映えだ。

ディリアズは、しばらく二人を見つめて待つ。

沈黙という重圧に、二人は持ちこたえる。

答える気はなさそうだ。と、ディリアズは目を閉じた。

目を閉じたまま、もう一度問う。

「答える気は、ありませんか？」

優しい声の調子は変わらない。

それなのに、背筋が凍る思いだ。

「あの、何の事だか……」

カナンが冷や汗をかきながらも、首をかしげる。

「そうですか」

ディリアズの言葉に、乗り切った！と二人は心の中でハイタッチをした。

目を閉じたまま、ディリアズは眼鏡を外し、ゆっくりと目を開ける。

二人を、綺麗な紫の瞳で捕らえると、同じ質問を繰り返す。

「何を隠しているのか。答えなさい」

ディアズの言葉に二人は、直立不動になり、目の焦点が怪しくなる。

「カナン」

呪縛に囚^{とら}われた。

心の制御が根こそぎ奪われる。

カナンはためらいもなく口を開き、今までの出来事を全て話さざるを得なかった。

隣に立っているラウンでさえ、カナンが話している事も分からない状態だった。

気がつくと廊下に出ており、眼鏡をかけたディアズが微笑んでいる。

何が起こったかは、覚えていない。

たしかディアズは椅子に座っていたはずなのに、

今はいつの間にか自分達は廊下にいて、見送られている。

「ディアズ様？」

何がか分からぬラウン。

意識が完全に戻った事を確認し、ディアズは告げた。

「用紙を提出してもらっておいて申し訳ないのですが、私の教室は皆、礼法の授業に出ています。」

今、この時から授業まで、宿舎から出る事も禁止します」

二人はポカンと口を開く。

自分達は、何も話さなかったはずだ。

廊下に出るまでの記憶はないにしても、それだけは断言出来る。

なのに、バレている。確実に、バレている。

ラウンは、嫌な汗が背中を伝うのを感じた。

もし今後『彼らに何かあれば』確実に疑われるだろう。
しかし、何故？

おそらくスパニアなら、この状況が理解出来ただろう。

『物体操術』だ。

そうとしか発表されていない彼の本当の能力は極秘とされ、
一部の先導士しか知らされていない。

彼は紅人の中でも、危うい存在として監視されていた。
複雑な思考を持つ人間をも操る能力など、禁忌であり、
そして、現在。彼に対抗しうる人間はいないのだ。

もちろん、彼女達が『人を操れる』など知る由もない。
しかし失敗に終わったとはいえ、計画の事は話せない。
不服ではあったが反論出来なかった。

「質問はありますか？」

その柔らかな言葉に、カナンが必死に抵抗する。

「あります！ 折角の氷結祭なんです。

スパニアに皆が揃ってするお祭りを、頑張ったご褒美にしたいんです！」

……そうきましたか。

うまい切り替えしをしてきたカナンに、ディリアズは心の中で苦笑する。

計画の目的の一つとしては、間違っていないのだ。

根底はスピアの為。

しかし、それに伴う悲劇はとてつもないシロモノだった。教室ぐるみの闘争となりかねない。

微笑を崩す事なく静かに答える。

「皆で揃って行つのであれば、礼法でも構わないでしょう。

壁を壊す。教室の備品及び窓の破損など、

一週間の内にどれだけの事をしてきたか、忘れてはいないでしょう」

「でも、その度に罰則はしてきました」

カナンは、なおも食い下がる。

ディリアズを目の前にして、カナンに『バレてるから！』とは言えず、

ラウンはカナンの袖を引っ張って、何とか気付かせようとするが、うまくいかない。

それに気付かないふりをして、ディリアズは残念そうに首を横に振る。

「他の先導士からは、『宿舍での謹慎』案が多く出ているのですよ？」

宿舍からは、氷結祭の為に皆が腕を奮った彫刻など、何も見えないう位置にあり、

ただ、響いてくる楽しげな笑い声を空しく聞いているだけになる。

講堂にいれば、授業とはいえ祭の雰囲気は味わえるのだ。

ディリアズは言う。

「それを曲げていただいて、特別授業の礼法に出させるという方向にしたのです」

二人は顔を見合わせた。

身に覚えがありすぎる分、それ以上の反論が出来ない。

「いいですね。皆さんにも伝えなさい。今から宿舍へ戻り、くれぐれも礼法の授業まで部屋から出ない事。食事は部屋まで運ばせます」

二人はうなだれて、教室へと戻る。

その途中、ふとカナンが気がついた。

「あれ？ 私、関係ないじゃん」

「え？ 何が？」

急に声を上げたカナンに、首をかしげる。
ラウンの方を見て、悔しそうに声を出す。

「だって、私が壁を壊したわけでもなきゃ、備品を壊したわけじゃないし。」

理不尽だわ！

その点については、返す言葉もないラウンだが、慎重に先程の違和感を話す。

「でも、あの様子だとなんかバレてたよ？ だって事は、しばらく自重した方がいいね」

「なんで！？ そんな……でも、未遂だわ。結局は私は、関係ないがね」

その言葉に言い返そうとしたが、ラウンは代わりにポツリと呟く。

「……連帯責任……。どんとこい……」

カナンはその場に崩れ落ちた。敗北した気分だ。

帰りが遅いのを心配したスピアが、二人を見つける。

廊下にうずくまっているカナンを見て、困った様に声をかけた。

「……カナン、どうしたの？ 大丈夫？」

「大丈夫。ちょっと泣きたくなっただけだと思う」

実際、泣いていたかもしれない。

歩くのを放棄したカナンを引きずって、教室に戻ると、ディリアズの言葉を告げる。

スピアのみ、小さく溜息を吐いた。

「そ、そんなの！ 横暴よ！」

一番の根源が、悲鳴をあげる。

綺麗に色を付けている爪を噛み、さらに言葉を荒げた。

「そんな、そんな事になったら、計画がパアじゃない！！」

言っんじゃないか。と思った。

でも、そこは我慢して言葉を飲み込むだろう。とも思った。

「……計画って？」

小首をかしげ、スピアのみ疑問を投げかける。

「何言ってるの！ それは！ ………………」

他三人からの恐ろしいほどの眼光に気付き、マーシャは言葉を濁した。

まずい。まずい事になった！

マーシャは蒼白となる。

仕方なくカナンが立ち上がり、助け舟を出した。

「実はスピアに内緒で、宿題出来たお祝いに、

いつも二人じゃ寂しいだろうで、皆で氷結祭に出ようって言うてたんだわ」

「……ホント？ ホントに!？」

スピアの純粋な瞳は輝き、大きく目をみはった。

「でも結局こんな事になっちゃって……ごめんね？スピア」

ラウンもここぞと便乗。

リシュレとマーシャは、話についていけず目をシロクロさせる。

「……ううん。礼法でも、皆が一緒だから。嬉しい」

本当に嬉しそうにはしゃぐスピア。

『嘘』など、オクビにもださず、二人ともとても爽やかに笑った。

「プロだわ」

マーシャが、やっと声を絞り出す。

少し呆れた様子で、リシュレもうなずいた。

すべては闇の中。

大切な誰かを傷つけるよりかは、優しい嘘をつくのもいいかもしれない。

クラス替えを行わない理由が、分かった気がする。

誰もウチのクラスなんて、担当したくないわね。
少しだけ、ディリアス様に同情。
私には誰が同情をくれる？

カナンの日記より 一部

抜粋

く嘘をつくのは誰が為？（後書き）

嘘だって、徹底すれば役に立つかも？
でも使い過ぎには、ご用心！人を傷つける嘘は、やめましょう。
必ずしっぺ返しが来ることでしょう。

「幸せ探しは誰が為？」

陽の光に、雪原が輝く。

眼下に広がる広大な森にも雪化粧がほどこされ、雲が切れると世界が普段より明るく感じられた。

寒さは厳しいが、久方ぶりの晴れ間に気分も高揚する。

それらに反して、カナンは一人教室で本を読みふけていた。

リシュレは陽のあたる床にシートを敷き、全身に光が当たるように寝そべっている。

幸せそうだ。

とても幸せそうだ。

カナンは本を閉じ、机にしまう。

「決めた。私、幸せをみつける！」

リシュレはポカポカ陽気に目を閉じ、寝ているのか返事はない。

他三人は、外でクラス対抗雪合戦。

誰もカナンの言葉に突っ込む者などいない。

カナンはいよいよ座っている事が耐え切れなくなり、音を立てて立ち上がったか

と思うと、コートを掴み教室から飛び出した。

リシュレはやはり、微動だにしなかったが……

無意味に飛び出したはいいものの、カナンは外に通じる扉の前ではたと立ち止まる。

「そうね。そうだがね。外とは限らんわね。」

ひょっとしたら館内の可能性だってあるかもしれんで」

一人うなずき、方向を変える。

扉を少し開けたら冷たい風が吹き込んできて、外に出たくなかったなんて、言ったり言わなかったり。

リズムを刻むように歩きながら、カナンは顎に手をやる。

「目に見える幸せって何かやあ。今まで入った事のない場所と言うと……」

先導士室？私室？調理室？」

先導士とて十数人いて、それぞれに指導室と私室が指定されている。

もちろん生徒達は三十数人いて、大体が五人一組を基本として、各教室と私室がある。

すべてを覗くのは難しい。

調理室もまた然り。

当番制で、給食係が決まっている。おいそれと足を踏み込める場所ではない。

万が一、食材がなくなった場合疑われたら実費で弁償だ。

たとえどこに触れていなくとも、怪しい動きは禁物なのである。

「入るのは何とでも言えばいいんだで。問題は外に幸せが転がった場合だわ」

口八丁、言葉で丸め込むのは得意なのだが、

一人凍えながら外をうろつくのはごめんだ。

自然と目を向けた窓の外では、かなりの人数が雪合戦に参加し、空を切る雪玉の数が半端ない。

恐ろしい光景だ。

目を背け、自分の幸せに関して考えを戻す。

幸せ。

自分にとっての幸せって何だろう。

自分の能力を最大限に使って出来る事？

とりあえず、ポケットに入っていたコインを掌の上に乗せた。
五センチほど浮かせては落とす。

「……なんの役にも立たんわ」

カナンは大きく溜息を吐いて、コインをしまった。
指でコインをはじいてた方が、よっぽど高く飛ばせられるだろう。

彼女は左のまつげが紅い。左目を閉じてまつげを触る。
自分の能力が役立たずだと感じる時の癖ではあるが、本人は気付いていない。

実際、役に立つ事の少ない能力である。
さらに言えば、自分が持てる範囲の重さしか動かせなのだ。

外で悲鳴があがる。

ある意味、雪合戦の勝敗が決したようだ。
半分に割れた大きな雪の塊の下から、誰かの足が伸びている。

心底、参加しなくて良かったと思うカナン。

その光景に凍り付いていた参加者達が、慌てて動き出す。

「あれは幸せとは、ほど遠いわね」

雪合戦に参加していた者は、怪我人が出た時点で『連帯責任発令』だ。

たまたま見ていただけとはいえ、同罪にされては不幸にもほどがある。

幸せを探しに出たのに。

と不愉快に思いながらその場から離れた。

「おや。カナンさん、浮かない顔してますね？」

何も思いつかずしょぼくれていたカナンに、反対側から来たデイリアズ

が声をかける。

「デイリアズ様。と、ドリュウ様。ミーティングは終わっただんですか？」

「ええ、さきほど。お茶でもいかがですか？」

デイリアズは、与えられている先導士室へと招き入れた。

先導士二人に挟まれいたたまれないが、逆らう事も出来ない。

悩みといっても、たいした悩みではないのだ。

いや、カナンにとっては大事かもしれないが。

「いやあすみませんねえ。僕までご馳走になってしまっただ！」

デイリアズの補佐として、ドリュウは雑務をこなしているのだが、実際は彼の監視を命じられている。

ご馳走に。と言っているが、用意しているのはドリュウだ。

カナンは突っ込みを入れるのを、紙一重で我慢した。

先導士に楯突くのは、まずかろうと瞬間的に考えた結果である。

危ない所であった、試されている。と感じ、カナンは気を引き締めた。

「紅茶にレモンはいりますか？」

「あ、砂糖五杯とミルクがあれば」

カナンは遠慮なく掌を見せ、突きつけるように前に出す。

ドリユウは笑顔のまま一瞬固まり、何かを振り切るかのように力ナンを見た。

「ええと、ごめんね？ミルクは置けないんですよ」

「じゃあ、レモンで」

開いた手は引つ込めない。

ドリユウは笑顔を絶やさず、無言で砂糖を入れた。

ディリアズに視線を送ると、小さく首を振る。

聞いているだけで胸焼けを起こしそうだ。

二人の意見は、同じ物であつたろう。

砂糖たっぷりのカップに茶を流し込む。

お茶にたゆたう砂糖の揺らめきを見て、吐き気を覚えるが、素早

くカナンの前に

置き、視界から遠ざけた。

これで安心だともいうように深く息を吐き、砂糖なしのお茶を自分とディリア

ズに用意する。

ディリアズに渡した時、カナンがカップに口をつけるのが目の端に入った。

見てはいけない。

ドリユウの脳みそが指令を送るが、人間の怖いもの見たさはそれを凌駕した。

そして、深海へ誘われるほどの後悔が訪れる。

「ディリアズ。非常に失礼かもしれないが、用事を思い出した」

「いいから、ここにいなさい」

笑顔のディリアズも、心持ち顔から血の気が引いていた。

誰が一人で逃げていいと言った？

言外でそう言っている。

強行突破しようとすれば、彼は『眼鏡を外す』だろう。

この際、カナンに能力がバレる事も厭いとわない。

そんな事をされたら、監視としている自分にどんな処分が下る事か。

誰か任務を代わってくれ！

葛藤しながらも、留まっているドリユウは不幸だろう。

カナンは小さな幸せを手に入れたが。まだ足りない。

「デイリアズ様は、何をもって『幸せ』と思いますか？」

唐突な質問に、デイリアズは少し真面目な顔をする。

「幸せですか。そうですね……私の教室が平穩無事に済む事でしょ
うかね」

急に少し不幸な風が吹いた気がする。

カナンは、風向きを変えようとドリユウの方を向いた。

「えと、ドリユウ様はどうですか？」

「僕ですか？そうですね。今の状況が打破出来れば、とても幸せになります」

なんだか暗に責められている気がする。

いけない。ここにいてはいけない。

背中にイヤな汗をかきながら、カナンは席を立つ。

「あの、ありがとうございました。

相談なんですけど、カップごとお借りしてもいいですか？」

「ええ、構いませんよ」

自分の分のお茶をこぼさないように気をつけながら、一礼して部屋を出た。

扉を閉めた後、ドリユウが盛大に溜息を吐く。

「ドリユウ。こんな事でうろたえているようでは、彼女達とは付き合えませんよ」

「……よく普通にしてられるな。作り笑いで精一杯だ」

生徒がいなくなると、途端に言葉遣いが悪くなる。

こちらのが地なのだが、一応先導士である以上、生徒に示しがつかない事は極力出来ない。

「当たり前です。それこそ彼女達の事は、幼い頃から知っているからね」

まだ疲れた顔をしているドリユウに、口の端を持ち上げて笑いかけた。

「それに、私には『切り札』がある」

彼の能力である事は明白。

疲れの色をさらに濃くさせ、ドリユウは呻く。^{うめ}

「監視の意味があるのかよ」

デイリアズは、とても軽やかに笑った。

それを見て、ドリユウは頭を抱える。

……誰か！ 本当に、任務を変わってくれ！

その心の叫びは、誰にも届かない。

それこそ誰もやりたくない任務を、昔からクラスが同じというだけで選ばれ

ただ。

知り合いである方が、何かと対処出来るだろう。
という安易な考えで。

彼の『いたずら』の尻拭いを、昔からしてきた。

先導士になれば、離れられると思ったのに。

まさかそれが仇になろうとは……

ドリユウの心の折れっぷりなど知らず、カナンは幾分気持ちを弾ませて、

教室の扉を開けた。

リシュレは日向を追いかけて、出て行く時より少し移動しているくらいだ。

たんこぶをお土産に、残りの三人も戻ってきている。

「ディリアズ様からお茶貰ったで、皆のカップ用意しりん！」

リシュレは動かない。

マーシャとスピアは、痛みで反応がにぶい。

ラウンは仕方なく、皆の分のカップを机に並べ、カナンの手元を見て心が躍る。

「カナン、すごい！ ひよっとして砂糖入ってない？」

「お砂糖ですって！？」

さすがにリシュレが、日向から出ないように振り向いた。

よっぽど特別な時でしか、甘いものは食べられない。

食料は町から数回しか調達されない為、余分な物がないのだ。

ただし、例外もある。

先導士が何らかの理由で外出する際、自らの『紅い部分』を隠し

さえすれば、
町で買い物をして帰ってこられた。

隠しさえすれば、能力を使わない限り普通の人間と変わらない。

カナンはスプーンで、底に沈んだ砂糖も五等分する。

「ふふん。感謝しりんよ？ちゃんと五人分の砂糖入つとるでね」

「やったじゃん！さすがカナン、今日は最高の日だね！」

ラウンの言葉に頷きながらも、ふとカナンは思う。

幸せって、こういう小さい『嬉しい』の積み重ねじゃないだろうか。

大好きな本を読む事が出来る。

甘いものが運良く手に入る。

そして何より、皆に喜ばれた。

それを嬉しいと思うし、このまま続けばとも思う。

もちろん、マーシャ達の『悪さ』がこちらまで被害を受けると腹も立つ。

でも、このクラスで良かったのではないだろうか。

もちろん『連帯責任』にも辟易する。

でも、皆にも分けようと思ったのは、何よりも大事にしたいから。

「そっか。私は幸せだわ」

呟くように言うカナン。

「私も幸せだよー！」

「すべてはカナンのおかげですわ」

ラウンがたんこぶの痛みも忘れたかのように言い、リシユレが教

室備え付けの

暖炉から、ヤカンを持ってきた。

頭を押さえながら、スピアも覗き込む。

「……カナン、すごい」

「カナン偉い！ 痛みも忘れそうだわ」

マーシャがカナンに抱きつくこうとして、両手で肩を押さえ抵抗されている。

いつの間にか、二人で力比べになっていたが。

五人分のお茶が完成した。

とてもとても薄い色をした、名ばかりのお茶。

「では、カナンに感謝して乾杯！」

ラウンが音頭を取ると、朗らかな3人の声が教室中に響く。

『カナン、次もよろしく！』

カチンとカップをぶつけ合った。

先導土室で、ちょみつと舐めたのは内緒！
さすがに砂糖を五杯も入れると、飲めるもんじゃなくなるね。

ゝ幸せ探しは誰が為？（後書き）

だんだんサブタイトルが長くなっていく。

とにかく盛り上がる事をしないカナンを書くのは、自分でキャラクター作っておいて、難しかったわあ……

読みに来てくださる方に感謝です！

嬉しいって原動力になりますね

ありがとうございますゝw

ラウン・リシュレの試練？旅立ち

白銀の世界もやがて消え、眩しいほど鮮やかな若草色が広がる。果てしなく澄んだ青い空。流れる雲は薄く白い。

平地で見るよりも景色が違う。

まだ風は強いが日差しがある為、冷たさも和らいでいる。

この時ばかりは、小高い丘に建つ館に住んでいてこれほど喜ばしい事はない。

華やかな笑い声が館中に響き、全体が浮き足立つ。

薄汚れた大きな館は、それでも光に浮き立つように白さが際立ちそびえ建っている。

壁に沿いながら走ってくる、これまた白いウサギ。

少し遅れて物凄い勢いで駆けてきた、黒髪ショート少女。

左右に一束ずつ分かれている特徴的な紅い髪の毛。

普段は『触角』などとからかわれているソレも、今や黒髪と混ざるほど、

振り乱れている。

館を囲んでいる高い堀の角に追い詰め、少女ラウンは立ちあがった。

逃げ場を失い、ウサギが地面を掘り出す。

「ふっふっふ。そんな事しても無駄だよ！ おとなしくこっちにきなさ……」

突如、背後に殺気が膨らむ。

瞬間、守らねばとウサギに両手を伸ばすと、

ウサギは野生の勘が働いたのか、ラウンの腕に飛び込んで震えた。そんなウサギを庇いながら、殺気の根源へと目を向ける。

案の定というか、またかと言うべきか。

そこには、金髪を振り乱し沈んだ目の少女が肩で息をしていた。ほとんどバレているが秘密とされている国王の娘は、紅い痣のせいでこの館に

来るはめになった。

社会勉強と能力の訓練をする為だが、どうも本人の自覚は薄い。

そんなプライドの高い少女リシュレは、何故だかずぶ濡れである。

「うふ、うふふはははっ！ 見つけたあ！」

怖い。果てしなく怖い。

パニックに陥ったり、耐えられないほどの『何か』が起ると、リシュレは自我が揺らぎ、ブツンと理性の糸が切れる。

そしてこの有様だ。

ラウンは胸にウサギを抱え、後ずさる。

背には堀。自分の能力は『動物との会話』。役に立たない。

大きく舌打ちし、首にかけていた小さな石のペンダントを外す。

リシュレが胸を張り、スツと右手でラウンを指差し、口の端を持ち上げる。

「燃え上がれえ！」

楽しげにリシュレが叫ぶ、と同時にラウンは彼女に向かって、山なりに小石を投げつけた。

良い子も悪い子も、普通の子だって真似しちゃダメだぞ！
この子達の耐久力が、半端ないから出来るんだからね！

と注意書きもそこそこに、万が一に備えて、俊敏にウサギを中にしうずくまる。

キレイタリシユレの『火』は、いつもの蠟燭の灯なんかの比ではない。

炎とは生ぬるい、業火と呼べるほどの代物だ。

圧倒的な熱量が生まれ、周囲に被害を撒き散らす。

炎が空を走り、触れていないはずの植物が水分を奪われて枯れ落ちた。

ラウンの頭上を炎が渦を巻き、轟音を立てる。

避けるのが遅れたか、後ろ髪の先っぽがコゲた。

感覚の鋭いラウンには、少しばかりだが燃える時のイヤな音も臭いも感じ取り、顔をしかめる。

しかしすぐに、小気味良い音がして、恐ろしいほどの大火が一瞬にして治まった。

そつと顔を上げて見れば、リシユレが脳天を押さえてうずくまっている。

小石がうまい事当たってくれたようだ。

ラウンは素早く立ち上がり、警戒する。

「……痛いすわね！ これだからラウンは女子力低いって言われるんですわ！」

そして業火の一番近くにいた為か、リシユレは少しだけ乾いたが濡れている自分

に気付き、タレ目を頑張って吊り上げた。

「酷い！ これもラウンの仕業ですわね！ 私が何をしたと！？」
肩を怒らせ、ラウンを睨みつける。

普段のリシュレに戻った事を確認し、肩を撫で下ろす。

「ちよつと、言いがかりはやめてよね！ 水浸しなのはあたしのせいじゃないよ！」

「頭にコブが出来ているのは否定しませんのね」

腕から逃げ出そうとしていたウサギが、またラウンにしがみついて震えた。

飼育小屋から逃げ出さなきゃ良かったと、後悔しても遅いのだ。

「じ、自業自得でしょ？ リシュレがキレなきゃこんな事にはならなかったんだよ」

リシュレは濡れたまま腰に手を当て、ふんぞり返る。

「笑止ですわ！ 私が『キレた』などと。そんな淑女にあるまじき行為しなくてよ」

聞こえるように、ラウンは本日二度目の舌打ちをした。

そう、リシュレはかなり都合の良い事に、『キレた』時の記憶がない。

たしかに理性のタガが外れなければ、あんな自分が燃えかねないような炎

は出さないだろう。

もちろん、あくまで推測の域ではあるが。

本人が『覚えてない』と言う言葉に、ラウンの感覚を持ってしても、嘘を読み取れないのだ。

証拠としてウサギの証言はあるが、自分以外はその言葉を理解出

来ない。

壁が黒く煤けていても、前からだと言い張られるだろう。

事実こんな塀の角になど、意識がはつきりしている時には誰も用はない。

そこへ、ドリユウが物凄い勢いで現れた。

「何の音だ！」

「あら、ドリユウ様。ウサギが逃げましたの。でもご安心なさって？」

あくまで優雅に左腕を上げ、親しい者を紹介するかのように微笑する。

「無事、捕まえる事が出来ましたわ」

「あー、そーゆー事です」

ラウンが疲れきった目をドリユウに向け、アゴでリシュレを指し、さらに壁を示す。

濡れているリシュレを見たドリユウは、全てを悟る。

表向きはデイリアズの補佐として行動している為、当然彼女達の素行は把握していた。

明らかな異常を前に眉根を寄せ、ドリユウは唸るように声を絞り出す。

「……デイリアズが呼んでいるから、人が来る前に行きなさい」

こんな生徒達に愛想良くする意味があるのかと、ドリユウは本気で悩んだ。

貧乏くじばかり引かされている。

そんな思いは、決して勘違いではないだろう。

ラウンはペンダントを拾い、2人で一礼して駆け足でその場を離れた。

「そいえば、ドリユウ様の能力って見た事ないね」

「そうですけど。さほど興味ありませんわ」

リシュレは何気に酷い事をさらりと言ったが、ラウンもうなずいている。

「確かにね。ディリアズ様が微笑みかけてくれるなら、他の男の存在意義もないよね」

「ラウンのその考えも興味どころか、特に気にも留めたくありませんわ」

飼育小屋にウサギを戻し、リシュレは服を替えに行く。

ラウンはそのままディリアズの元へと馳せ参じた。

一分、いや一秒でも早く彼を見つめていたいのだ。

「おや、来ましたね。飼育小屋の掃除はつつがなく終わりましたか？」

扉を開け、ディリアズの柔らかい微笑に、吸い寄せられるように先導士室に入るラウン。

「つつがあつたんですが、生還出来ました！」

「……やはりあの音は、あなた方でしたか」

微笑が苦笑に変わる。

ラウンが慌てて先程の出来事を報告した。

とにかく大火災は免れた事、その後始末を、おそらくドリユウがやってくれて

いる件まできた時、やっとディリアズから笑みがこぼれる。

本当は大爆笑したかった。

ディリアズは口を押さえ、ラウンに背を向ける。

彼は昔から自分の『故意的被害』の尻拭いを、仏頂面で行ってた。

そんな自分から離れる為に猛特訓をし、見事紅人を管理する上級官吏になった

というのに。

二度と会う事もない！ と豪語していたのに。

結局はまた自分の傍に就く事となり、今度は生徒の尻拭いばかりだ。

これが運命と呼ばずして、何と呼ぶ？ 不幸の極みか？

「あの、ディリアズ様？」

「いや失礼。ドリユウが現場に残ったのなら、問題ないでしょう」

「そうですか！」

ディリアズの笑いのツボだった事は確かだが、ラウンの方へと向き直った顔は、いつもと変わらない微笑であった。

彼女にとって、愛するディリアズの言葉はすべからく正しい。

たとえ嘘を読み取れたとしても、黒い物を彼が白と言えばソレに従う。

前向きな判断をするのだ。

その結論には、何か深い意味があるのだろう。と。

現に今まで、そんな理不尽な事を言いはしない。
それ故の信頼でもある。

ほのぼのと二人で微笑みあっていると、リシュレが到着してしまった。

三度目の舌打ちをしたかったが、普段がどうであれディリアズの前では、

『可愛い生徒』をアピールしたい。

「ディリアズ様、大変お待たせ致しました」

「では、始めましょうか」

ディリアズが椅子に腰掛け、二人は机を挟んで前に立つ。

緊張した面持ちのリシュレは、ラウンを盗み見て下唇を小さく噛む。

（私の身に覚えがない以上、ラウンが何かしたに違いありませんわ！）

そんなリシュレに気付かず、ラウンの胸は高鳴った。

（この真剣な雰囲気。ディリアズ様、リシュレを証人にあたしと婚約！？）

頬が紅潮してくるラウンとは対照的に、リシュレは青ざめている。
（まさか私が誰にも秘密で取り寄せた、ローズオイルが見つかったのかしら？）

（まさか！ まさか！ ついに！？）

二人の心の声が様々にピークに達し、
静かに伺っていたディリアズへ同時に詰め寄った。

『ディリアズ様！ 覚悟は出来てます！』

その言葉に、ディリアズはうなずく。

「そうですか。では山向こうのファークラスという町に、鍛冶屋のアデレさんがいます。」

その方に、この品を届けて欲しいのです」

机の上に2つの小包を置き、二人の前に滑らせる。

ラウンとリシュレは顔を見合わせて、今一度ディリアズを見た。

『それだけ、ですか？』

安堵と落胆がはつきりと見てとれる。

「もちろんですよ。ただし、今すぐ出発して下さい」

「あの、あと数時間で日が暮れますけど」

困った顔で問うリシュレに、ディリアズが皮袋を机に乗せた。

「これは往復出来る分の資金です。もし余れば小遣いとして良いですよ」

二人の頬が紅潮し、一気に顔が輝く。

（泣く泣く諦めていた、ソーロンダ製のコスメセットがこの手に！）

（節約したら手袋買えるかな？）

今年の雪合戦で破れてしまったのだ。

そして二人とも、金を分け合う事を考えていない。

自分の事で精一杯なお年頃である。

しっかりと紐で縛ってある小包をそれぞれ手に取り、

二人は同時に金の入った袋に手を伸ばした。

お互い無言で火花を散らし、牽制し合う。

「そうですね、これはラウンさん。あなたが管理なさい」

皮袋がラウンの手に渡り、信じられないモノを見る目で二人を見るリシュレ。

「どういう事ですか？ 庶民にお金など渡したら、無駄に使ってしまいますわ！」

「ではリシュレさん。あなたは一日いくらあれば足りると思いますか？」

ディリアズは、柔らかに尋ねた。

見下すように胸を張り、腰に手を当てたりシユレが高らかに宣言する。

「いくらなどと決め付けるのが、庶民の悪い癖ですわ」

ラウンは、それこそ信じられない者を見た。

あくまで微笑を絶やさず、ディリアズがラウンに声をかける。

「では、くれぐれもお願ひしますね」

「はい！ お任せ下さい！」

誰にも奪われないように、ラウンは皮袋の口をギュッと握り締めた。

何故認めてくれないのか。

不服のリシユレも、ディリアズにはそれ以上詰め寄れない。

二人の異様な空気を、リシユレはさすがに感じ取っていた。

「他の三人にも伝えて、すぐに出発します」

「いえ、二人で行って下さい。残った三人には、やって貰いたい事がありますから」

ラウンの動きが止まる。

「え。じゃあ、カナンと一緒にじゃダメですか？」

「残った者をまとめる人間が必要ですからね。」

それに、リシユレさんにも『庶民』の生活を知って貰いたいですし」

「別に知りたくもありませんけど。ディリアズ様が言われるなら、従いますわ。」

そういう契約ですもの」

ラウンは頭を抱えたかった。

どう考えても、苦勞が目に見えている。

では、マーシャと一緒にではどうか？

キレる事はなくとも、トラブルメーカーだ。
きつとアッチコッチ行ったあげくに、迷子になって怪しい人達に
売られそう。

では、スピア……はまだ幼い為、遠出はやめといた方がいいだろ
う。

カナンがベストではあるのだが、残ったメンバーを考えると、
スピアがあまりにも不憫である。

ディリアズ様や、ドリユウ様がいつでも見張ってられるとは限
らないのだ。

ラウンは散々悩んだあげく、呻く様に声を出した。

「分かりました、頑張ります」

「一つ言い忘れていました。小包はアデレさんに渡すまで、誰にも
触らせないように
にして下さい」

「はい」

ラウンもリシュレも、不思議そうな顔をしつつも小包を握りしめ
た。

「いいですね？知り合いに出会っても信用してはいけませんよ。騙
そうとする紅人

も中にはいますからね」

「幻術とか、そういう類ですね。気をつけます」

「暇な人間が中にはいますのね。くだらないですわ」

「うなずきながらも、小包を掌で隠そうとする。」

身支度を整え館を出る頃には、かなり陽が傾いていた。
リシュレがどうしても持っていく物が決まらなかったのだ。

出かける時の様相は決まっている。

どこぞの宗教に似た修道着を着て、外に出なければならぬ。頭も隠す為、ラウンも平気で外を出歩ける。

二日分の着替えと毛布。資金と小包。湯を沸かせる小さな鍋と、コップ。

それだけで大丈夫なはずなのに、リシュレの荷物はでかくなった。

クシやタオルならまだ分かる。

重たいコスメセットも許そう。

木の丸イスってなんだ。

ベッドはどうやって運ぶかなんて、考えるべくもない！

寝床が変わると寝られない？

気持ちは分からないでもないが、そんなに遠い場所でもないじゃないか。

部屋にある物を全部持ち出そうと悩むリシュレの荷物は、ラウンが有無を言わ

さず独断で詰め込み、諦めさせた。

野犬か狼が遠くで鳴いている。

眼前に広がる森は、暗く沈む。

獣道を辿り、草原を抜けて町に着くのは夜更けだろう。

見晴らしの良い草原で野宿だろうな。とラウンは溜息を吐いた。

そんなに荷物が多いわけでもないのに、

リシュレは荷が重いか、暗くて先が見えないから動けないとかで休憩ばかり。

「なんの為にフクロウに頼んで、道を間違えないようにしてと思

ってるの！」

「……ラウン。あなた本当に何かした覚えはありませんの？」
「どういう意味よ」

陰湿な空気が漂い、先を行っていたフクロウは木に留まり、
面白そうに二人を眺める。

「私の身に覚えがない以上、ラウンが何かしたとしか思えませんわ
！」

「リシュレが、ちょっとした事でキレなければ、あたしが巻き添え
食うなんてあ
り得ないんだけど？」

「まだそんな事言ってますの？ そんな記憶はありませんわ。失礼
ですわよ」

風が木々を揺らす。

ザアツと波打つような音が耳につく。

「記憶になくても、やってるの」
「証拠がありませんわ」

森の静寂すらも、腹が立つ。

「……絶対に、ぜつつつつつたいに証拠挙げてやるから！ 覚えて
なさいよ！」

木々に声が反射して、木霊が返る。

フクロウのみ、楽しげにホウと一声鳴いた。

ラウン・リシュレの試練？旅立ち（後書き）

続いちゃってます。

ラウン・リシュレの試練？裏切り者は誰？

夜霧が辺りを包み、闇夜が更に深みを増している。

二人の少女が町に足を踏み込んだ時には、すでに夜も更けていた。街灯の油はいつまで持つのだろうと考えながら、足を速める。

まばらにしかない街灯では死角が多く、見通しが悪い。

酒場からは未だ大騒ぎする声も聞こえ、それだけでも安堵する。真の闇というものは、それだけで不安が募るのだ。

「ラウン、もう歩けませんわ」

街灯の一つに持たれかかり、ラウンを睨む。

「宿屋つて、この辺だったんだけどな」

まったく怯むことなく辺りを見回したが、

看板も出てないどころか固く扉が閉まっている。

酒場にも簡易的なベッドはあるのだが、リシュレは頑なに拒んだ。あんな空気も人間の質も悪そうな所にはいられない。と言うのだ。

絡まれる事を考えるのはたやすいが、だからこそ安く泊まれるというのに。

「お金浮かす事考えたら、さっきの酒場でもいいじゃんか」

「私たちは……いいえ、私は淑女ですよ？」

安全で優雅な宿に泊まりたいのは当然でしょう！

お金の節約ポイントを間違えてはいけませんわ」

あんたにだけは言われたくない。と強く心の中で反発したものの、正論ではある。

鍵もかかるかどうか分からない宿で、万が一の事でも起きたら大変どころではない。

「分かったよ。もうちょっと先に行ってみよ?」

「仕方ありませんわね」

暗闇の中、一人待つのもごめんである。

痛む足を引きずりながら、リシュレが荷物を抱え直した。

夜霧をかき分けるように歩き、ラウンの耳は足音を捕らえる。

人のそれとは思えない。

引きずるような足音。

咄嗟にリシュレの腕を掴み、街灯の明かりが届かない狭い横道に引つ張り込む。

「ちよつと! 痛いすわよ!」

「静かにして!」

リシュレの口をふさぎ、自分も息を潜めた。

ただならぬ状況を感じ取り、リシュレも息を殺しつつ先程までいた方を伺う。

引きずるような、何か濡れたタオルを叩きつけるような奇妙な音。

影が長く伸びてくる。

二人は自分は壁であると言わんばかりに、壁に張り付く。

(ラウン、あなた何とかしなさいよ!)

(バカ言わないで! 攻撃的なヤツだったらどうすんのさ!)

ラウンの言葉に、今の状況を忘れてリシュレが憤慨した。

「バカですって?」

慌ててリシュレの口を塞ぎ直す。

足音は止まっている。

声が聞こえてしまった事は確かだろう。

イヤな汗が背中を伝い、ラウンはゆっくりと振り向いた。影の頭が声の主を探すように動く。

万が一、リシュレが「キレた」らどうなるだろう？

木造の建物も多くある為、きつと大火災が……

未確認物体に大人しく襲われるか、放火魔として犯罪者の道を歩むか。

どちらも却下である。

どんなヤツだとしても、交渉は成立させなければならない。断固としてだ。

心を奮い立たせ、影の方へ足を向けた。

武器は首から提げているペンダントと、背負っているリュックのみ。

それでも、いざという時振り回せば、それなりに痛かるう。

影が動き出した。

ラウンは足を止め、リュックを盾にする。

どうする？「どの生き物」で声をかける？

ラウンはためらい、鷹の鋭い鳴き声を発した。

ただ挨拶しただけなのだが、影は相当驚いたのだろう。

尻餅をついたようだ。

ここぞとばかりに横道から飛び出す。

「お願い！ 話を聞いて！」

人間の言葉で声をかけると、ひっくり返っていたのはカエルだった。

ラウンはそれでも、辺りに目を配る。

他に潜んでいるものはいなさそうだ。

「……カエル？ もっと大きなのだと思ったんだけど」
「なにするんよ〜食べてもオイシクないんだで〜」

カエルは、肝を潰すほど驚いたのだろう。
大きな目からはポロポロと涙をこぼしている。
カエルにしては確かにでかい部類に入るだろう。
大人の手の平ほどある大きさなのだ。

「あー……驚かしてごめんね？ あんた一人？」

「怖かったんだで〜歩いてただけなのに〜」
仰向けにひっくり返った状態で、嘆き続けるカエル。
ラウンは、困ったようにリシュレを呼んだ。
姿勢も良く、優雅に横道から現れるリシュレ。

「正体はコレですか？ 少し期待外れですわね」
見下すような視線を向け、鼻を鳴らす。

「ああ〜皆でいじめればいいんだわ〜」
手足をピクリともさせず、ただただ涙を流した。
リシュレが目を見開いてカエルを見る。

「カエルのくせに、人間の言葉が話せますの！？」
愕然とし後ずさった。

ラウンは、とりあえずカエルを起こしてやる。
「食べないで〜食べないでよ〜」
「違っって！ 起こしてあげるだけだから！」

今度は、カエルが大きな目をパチクリさせた。
違和感なく自分と話す人間など、珍しい。

「あんだ〜だれ〜？」

「あたし？ ラウン。こっちの態度でかいのがリシュレ」

「事あることに失礼ですわよ！ ラウン」

凄まじい眼光をラウンは簡単に受け流し、カエルに向き合う。

大きな白いカエル。

ツルツとした体躯に、背中に三本の紅い線。

「あんたも紅い印が入ってるんだね。動物にも『コレ』が出る事があるんだね」

「あか〜？ わからん〜」

人間だけが『特別』ではない。

人間に出るモノが、動物に出ないわけがない。

「そつか。どこ行くの？」

「命の水〜いつも貰うから〜」

この先で開いている店と言えば、酒場くらいだ。

『酒』か。カエルが酒を飲むのか。

昼間だと子供に追われ、言葉を話せば気味悪がられる。

カエルの仲間からは言葉のせいで疎ましがられ、池を追われた。相手にしてくれたのは酔っ払いだけ。

面白半分に酒を与えたのだろう。

自棄か？ ヤケ酒か？

ラウンは溜息を吐いた。

「ねえ？ 変な味のする水なんかより、普通の水あげるからさ。ちよつと遠出するけど付いてこない？」

カエルが目を輝かせる。

「普通の水ゝアサツユ以外はゝひさしぶりゝ」

「ラウン！ そんなヌルヌルしたの連れてくつもり？」

リシュレがタレ目を吊り上げ、カエルは大きな目を潤ませる。

「水たらないからゝ今は少しかわいてるよゝ」

リシュレの目が更にきつくなる。

どうして怒られているのか分からないカエルは、オドオドとリシュレを見つめた。

大きな目から、またしても大粒の涙が溢れる。

「ああゝ！ きらわれるゝきらわれてゝ何もしてないのにゝ」

「存在自体が気に入らないのですわ！」

「……ああああゝゝゝ」

泣き崩れるカエル。

いい加減疲れてきたラウンが助け舟を出した。

「リシュレ？ カエルにだって何だって、心があるんだから傷つくんだよ。」

人間だけが特別じゃない。どんな生き物だって平等の権利があるんだよ」

「では聞きますけど。コレがカエルではなく、ムカデの場合に同じ事が言えますの？」

あくまで尊大な態度を崩さず問う。

夜にふさわしい静けさが、周囲を包む。

「……まあどうでもいいじゃんか。宿を探そうよ」

いくらなんでも『近所迷惑』を思い出す。

カエルも思い出したかのように、酒場へと足を向けたが、ラウンに拾われた。

「命の水もらいに行くから」

「やめときなさいって！ 普通の水あげるって言ってんでしょ」
うむを言わず、ポケットに入れる。

「いい？ 動かないで。何があっても喋らないで」

「しゃべらないく水くれるなら」

ここ所、溜息ばかりだ。

ラウンは空しさを感じながら、酒場へと足を向けた。

「まさか、あの巣窟で泊まるとか言いませんわよね？」

低く唸るような声をかけるリシュレに、振り向く事なくうなずく。

「まあ見てなさいって。リシュレも絶対喋らないでね」

「イヤですわ。絶対にイヤですわ！」

「じゃあ野宿してれば？ お金はあたしが持つてるんだからね」

歯軋りが聞こえるほど歯を食いしばりながらも、

リシュレは従うしかなかった。

騒々しい店内に入れば、

ムチムチした体形のおねーちゃんが忙しそうに声をかけてくる。

「いらつしゃい！ お嬢ちゃんたち。誰かお探し？」

「いえ、一晩泊めていただけにないかと思ひまして」

ラウンは笑顔を作り、場にふさわしくない爽やかに尋ねた。

さっそく近くにいた酔っ払い連中が、卑猥な言葉をかけてくる。

リシュレはさりげなくラウンを盾に避け、

酔っ払いがラウンに腕を伸ばし肩を組んだ。

「駆けつけ一杯、俺の酒でも飲んでいけよ」

「申し訳ありませんが、ワタクシの様な者でも神に仕える身。

あなたのお酒でしたら、どうぞあなたの糧として下さい」

笑顔を崩さず両手を前で組む。

思い切り吹き出し、おねーちゃんは手を叩いた。

「ほらほら！ 無理強いしたらバチが当たるよ、あきらめな！」

酔っ払いは肩を竦め、手を離す。

おねーちゃんが二人を手招きし、安全圏の調理場まで案内してくれた。

「私はマリル。

あんた慣れてるのねえ！ ウチで働いて貰いたいくらいだよ。

で？ なんだってウチに泊まりたいの？ 宿屋だってあるのに」

「はい。手持ちが限られてますから」

正直に笑顔を絶やさないラウン。

不安で少し青ざめているリシュレ。

二人を見比べて、また笑い出す。

「連れのコは、気に入らないみたいだね。まあ当然だと思うけど。

そうだね。出てく時にベッドメイクと使用した部屋の掃除してくれるなら、

二人で五ルカムでいいよ」

「五！？ ほんとですか、とても助かります！

あなたに神のご加護がありますように」

ご飯一食分の金額だ。ラウンは信心こそないが、心から願った。

「やだ、私は神様なんて信じちゃいないのよ。あんたたちには悪いけどさ。

部屋は空いてるし、掃除してってくれるなら手間賃もかかんないしさ」

「ありがとうございます！」

両手を組んで目をふせた。

その手を掴みマリルは苦笑する。

「やめてつてば。私の望む神なんてこの世にいないんだから」
「そうですか。ごめんなさい」

意味深な言葉だが、深く聞くことを許さない強さもある。
ラウンは頭を下げて、リシュレを促しつつ示された階段へと足を向けた。

一部屋以外、全て空いている部屋の一つに落ち着き、蝋燭を灯す。
カエルに十分な水を与え、固いベッドに突っ伏した。
途端に二人とも睡魔に引きずられ、眠りの淵へと落ちる。

階下の酒場から誰とも知れず、来ないカエルの話が出たが、
騒々しい波に紛れていった。

翌朝、起きないリシュレの予想を的中させつつ、早めに起きたラ
ウンが掃除を済ます。

カエルは水から体を半分出して、幸せそうに寝てるようだ。
一通り終わらせ、身支度も整える。

窓から入ってくる朝日が、気分を高揚させた。
寝たままのカエルを少し拭いてポケットに入れ、リシュレを叩き
起こす。

「あら、早いんだね」

疲れを露わにして、マリルが声をかけてきた。

「お世話になりました」

ラウンが頭を下げると、カエルがポケットから頭を出す。

「マリル、命の水もらいにきた」

ポケットから頭を出し、嬉しそうな声を出すカエル。

飛び上がりそうなほど驚いたラウンだったが、マリルはただ目を
丸くしただけだ。

「なに？ あんたのカエルだったの？」

「いえ！ 違うんです！」

慌てるラウンに、マリルが真剣な顔で手を差し出す。

「だったら、渡してもらえるかな」

「……どうしてですか？ このコが『紅人』だからですか？ カエルだけど」

ラウンの言葉に、マリルが息をのんだ。

それを見て、ラウンが断固として言い張った。

「カエルは渡しません」

「……教会が紅人を探してるのは、知ってるわ。みつけてどうするの？ 彼らが教会に足を踏み入れたら、生きて出られない。」

という噂を皆知ってるのよ？」

マリルの言葉に、息をのんだのはリシュレだった。

ラウンとて、神を崇める宗教が紅人を疎ましく論じているのは知っている。

知ってはいたが、そんな事になっているとは……

「ワタクシたちの『教会』では、そんな事許されませんから。

安心して下さい」

「食べないで、大きく育ってるけど、食べないでよ」

さめざめと泣き出すカエルは放っておく。

それでもマリルはラウンに詰め寄る。

「そのコを連れて行かれると、困るのよ」

「だから、どうしてですか？」

どちらも引かない。

マリルが下唇を噛み、吐き出すように言葉を紡ぐ。

「そのカエルは、私の婚約者だからよ。」

教会の連中に運悪く紅い痣を見られちゃってね、強制連行されたの。

油断した所を、うまく逃げて来たんだけどさ。人間に戻れなくてこのままってワケ」

リシュレが冷めた目でカエルを見つめ、溜息を吐く。

「とんだ災難ですわね。能力をろくに使いこなせないだなんて」
だから、あんたが言うな！

という言葉を危うくラウンは飲み込んだ。

「だから、彼を返してくれない？」

再度手を差し出すマリルに、リシュレもうなずいている。

ラウンはどうしても腑に落ちない事を素直に口にした。

「疑問があります。」

彼が教会にさらわれて、逃げてきたんですよね？」

「ええ、そうよ」

はつきりとうなずくマリルに、ラウンがゆっくりと言葉を選びながら、

扉を背にするようにさりげなく動く。

「だったら、『教会の人間』から彼を隠したいはずですよね？」

強制連行なんてした教会の人間のあたし達を、どうして泊めたの？」

「……あんな夜遅くに追い返すほど、イヤな人間じゃないもの」
笑顔で返すマリルに、リシュレも雲行きを察知する。

「嫌いな教会の人間に、安く宿を貸す意味が分かりませんわね」
リシュレの言葉には、さすがに言いよどむ。

ラウンが一本ずつ右手の指を立てていく。

「カエルを手懐けておく必要があつて、教会の人間に媚を売る必要がある。」

それで、初顔のあたし達にカエルを連れて行かれると

『非常に困る』のはどうしてか？」

「お金ですわね。」

紅人を買ってくれるような教会の人間に、売り飛ばす為

「ひどいゝひどいよゝ卵だつて産めるんだからゝ」

ラウンは、指を一本付け足した。

「カエルは、あんたの『彼』じゃないみたい」

「うるさいわね！　うるさいのよ！　私だつて生きていくのに必死なのよ！

自分じゃない者を売つて、何が悪いのよ！」

「教会に行ったら、どうなるか分かつてたんでしょ？」

「ジョイルが連れて行かれて！」

他の紅いヤツがのうのうと生きてるなんて許せないのよ！」

イヤな光景を振り払うように、頭を抱えるマリル。

ラウンがリシュレに外に出るように促し、声をかけた。

「悪いけど、カエルはあたし達が連れて行くから。」

引き取りに来た人間に言つといて？　詳細を教えなさいよつて」

追いかけてこようとするマリルの足元を、数匹のネズミが走り回る。

ラウン達は、彼らのおかげでまんまと逃げる事が出来た。

町を出て、街道を進む。

「館の買出しに来る町ですが、あんな事が横行してますのね」

幾分沈んだ声で、リシュレが呟いた。

ラウンは呆れた声で、リシュレの言葉を正す。

「何言ってるの。最初あたしも酷い事始めたもんだって思ったけど、

皆が間違ってるんだよ。

『教会』があんな堂々と人攫いを行ってるわけないじゃん？
それこそ信用がた落ちでしょうが」

「でも、ジョイルさんは現実に攫われてますのよ？」

足を止め、リシュレが憤慨した。

仕方なくラウンも立ち止まる。

「ひょっとしたらだけどさ。アレじゃないの？

他のクラスに入ってきた、イケメンと名高い女たらし。

たしかアレもジョイルだったと思うけど？」

「……教会の人間だと証言されてましたわ」

「気付いてる？あたし達が館を出る時に身につけてる物は？」

ちよいつと被っている布の端をつまんでやる。

日差しは柔らかく、心地良い風が頬を撫でていく。

リシュレが歩き出し、ラウンもそれに続く。

カエルはポケットの中で寝ているようだ。

「紅い痣が出たら赤子じゃない限り、強制だからね。

婚約者なら、なおさら離れたくないだろうし。

別に紅人じゃなくても、館に遊びに来ていいのにさ？

普通の人には入っちゃいけない場所と思われてるんだよね」

リシュレは黙ったまま、歩き続ける。

攫われてから一切連絡がなく、取り残された彼女としては

身を切るほど辛い生活だっただろう。

二人の怒りの矛先が、ジョイルへと向かったのは必然であつた。
館でチャホヤされて、彼女への手紙も書かず平和に過ごしている
ジョイル。

『許すまじ』

ありえないほどの低い声で、二人は静かな怒りを湛えてハモつた。

ラウン・リシュレの試練？裏切り者は誰？（後書き）

やっとおつかいが始動です。

私もですが、言葉は難しい。

誤解のないように生きていきたいものですね。

ラウン・リシュレの試練？～大事な事は何かしら？～

芽吹いたばかりの緑の中、山の麓へと到着するラウンとリシュレ。リシュレの悲鳴や、カエルの命の水騒ぎの為に、大目の休憩が余儀なくされていた。

通常より倍以上の疲労感の為か、ラウンの言葉数も少ない。麓の村が近づいているのに、リシュレがまた悲鳴をあげた。

「もう歩けませんわ！」

どうして乗合馬車を見過ぎす必要がありました！？」

「経費節約」

「そんな事どうでもよろしくてよ！」

近くの大きめな石の上にリシュレがハンカチを敷き、座り込む。またか。と、ラウンは溜息を吐き立ち止まった。

「野蠻ですわ。この私をこんなに歩かせるだなんて、だから庶民はイヤですよ」

「庶民関係ないですー。館にいたら皆平等なんですー」

リシュレは足をさすりながら、ラウンを睨みつける。

「私はあの村で待つてますから、一人で行って来るがいいわ」

「……ディアス様の話聞いてた？」

あの箱を手にしたなら、もう誰の手に渡してもいけないんだよ」
「同じお使いですもの、関係ありませんわ」

誰が監視してる訳でもありませんし。
とリシュレが呟く。

それでもラウンは首を振った。

「ダメだったら、ダメ。その方があたし的に楽だけどダメ。能力で細工がしてあるからこそそのセリフだと思っし」

考えられない話ではない。

鍛冶屋のアデレに渡した時、もしくは『違う誰か』が触った瞬間、何が起るか分からないのだ。

「あの村まで行ったら、美味しい物食べようよ。

そろそろお昼だしさ」

「仕方ありませんわね。こんなお使い、受けるべきではありませんでしたわ」

リシュレは重そうに腰を上げ、渋々歩き出す。

朝が乾パンだけだったせいか、美味しい物につられたのだろう。麓の村は間近である。

ラウンとリシュレが、館を出た直後。

味気ない白壁の先導士室で、留守番三人組が立ち並んでいた。まとめて呼び出された為か、緊張の度合いは計り知れない。いつも通りのディリアズに、三人とも心なしに青ざめている。

しかし、このままでは埒があかないと、

第一声を発したのはカナンであった。

「ディリアズ様。またマーシャが何か事を起こしたんですか？」

突然の投げ石に、マーシャが愕然とカナンを見つめる。

スピアですら、マーシャに向かって溜息を吐く。

「ななな何よ、皆して！ それって、酷くない！？
まだ何もしてないじゃない！」

マーシャの、あまりにもな狼狽振りが怪しさ満点ではあるのだが、
とりあえずディリアズは『まだ』の部分聞き流す。

「そうではないですよ。実は皆さんに頼みたい事があります」

その柔らかい声に、三人は不思議そうな顔をする。

我らトラブル五人組、正式な頼み事など初めての事だ。

その内二人は、すでにお使いに出発している。

「他にもありません。実はラウンさんとリシュレさんに渡した小箱
なのですが、

間違えて渡してしまったので、回収してきて貰いたいのです」

「回収、ですか？」

カナンは腑に落ちない表情で、聞き返す。

「ええ、といっても交換なのですが」

ディリアズはそう言って、新たな小箱を二つ机の上に乗せる。

部屋の中は静まり返り、少し悩んだカナンが二人に目配せした後、
言いにくそうに口を開いた。

「あの。質問があります」

「どうぞ」

眼鏡越したがまっすぐ見つめてくる、紫の瞳。
更に少しだけためらい、しかし意を決したように問いかける。

「噂なんですけど、教室内で二組に分けて、
試験を行うそうなんです、コレですか？」

「……カナンさんは正直ですね。その通りです。」

ではラウンさん達もご存知でしょうね」

カナンは首を横に振る。

「いえ、知らないと思います。聞いたのは先導士室に来る少し前で
すし、

ラウン達は『ディリアズ様のお使い』だと言っていましたから」

それを聞き、ディリアズが微笑した。

「いいでしょう。では言葉を変えましょうか」

先程の小箱を机の上で滑らせ、三人の方へ寄せる。

「これと同じ箱を二人は持っています。

どんな手を使っても構いません、

交換して私に持って来る事が出来たら……」

笑顔を崩さず、人差し指で眼鏡を少し持ち上げ直す。

「あなた達の勝ち。試験は合格です」

スピアが、小さな声で尋ねた。

「……ラウン達は、どうなるの？」

「もちろん不合格で、結果に沿った補習を行うだけですよ」

部屋に冷気が充満する。

マーシャの目が輝き、意欲に燃えている証拠だ。

二人は彼女から離れ、小箱を受け取った。

「ラウンに腹いせするチャンスだわ！」

「心の声が出ていますよ、マーシャさん。

あなただけ謹慎でもいいんですよ」

ガッツポーズのまま、文字通り凍り付く。

カナンが頭をこつんと叩き、表面の氷を落としてやった。

ディリアズが、ラウン達と同じように金の入った皮袋を、カナンに手渡す。

「これは当座の旅費です。余ったら三人で分けて良いですよ。彼女達は山向こうの町、ファークスに向かっています。その町に着く前に交換して下さい」

「分かりました。もう陽も暮れてますし、明日早くに出発します」

ラウンとリシュレが大騒ぎして出て行ったのは、ついさっき。今から出た所で、闇の森をスピアが歩くのは危険だろう。ディリアズは快く承諾する。

どうであれ、ファークスに着く前に交換出来れば良いのだ。

先導士室から出てすぐに、マーシャが抗議する。

「どうしてもに出発しないの！ 追いつけなくなるわよ！」

「あの二人なら、下の町に絶対宿取るで大丈夫だわ」

カナンの言葉に、マーシャは地団駄を踏む。

「そうじゃなかったらどうするの!？」

「そんなら聞くけど。あのリシュレが宿取らんと思うの?」

「……思わない」

口論はすぐに決着がつく。

黙らずを得ないマーシャを放っておいて、カナンはディリアズの言葉を、

心の中で反芻させていた。

違和感はずっと残っているが、それを隅に追いやって、

陽が昇ると同時に出発する。

万が一にも、間に合わなくなったら意味がない。

「ねえ、カナン。やっぱり夜の内に出不いと間に合わなかったんじゃない？」

「何言つとるの！ 安全第一！」

「そんな心配なら、先に行つて馬車でも捕まえといてくれん？」

「……マーシャ、ごめんね」

半分も下っていないが、すでにスピアの息があがっている。

スピアの謝罪に、カナンは無言でマーシャに圧力をかけた。

あからさまに、失敗した。とマーシャが顔色を変える。

「違うの、違うのよ！ スピア！ 私はただ……」

「馬車の確保」

「了解です！」

身振りも激しく説明しかけたマーシャだったが、

カナンの厳しい一言に、踵を返して緩やかな勾配の森を駆け足で下っていった。

「……カナンも、ごめんね？」

「スピアが気にする事ないの！ 使えるモンは、何でも使えってね。スピアも覚えときんよ」

「……うん」

カナンのとんでもない言葉を、スピアは素直に頷き微笑する。

それに気を良くしたカナンは頷き返し、

スピアの速度に合わせて歩き始めた。

途中で走り疲れたマーシャを拾う事になるだろうと思っていた力

ナンだったが、

良い意味で期待は裏切られる。

マーシャは、なんとか馬車の都合を付ける事に成功していたのだ。

「どう？ 私だって、やる時はやるんだから！」

馬車の前でふんぞり返っているマーシャ。

実際、さほど時間も違わなかったのだが、

「マーシャ偉い！ まさか出来ると思わなかったで、
ちよつと感動？」

「……マーシャ、すごい！ ありがとう」

礼を言われたり、褒めそやされたりするなんて館に入って、
初めての事ではないだろうか。

「嬉しいと……本当に涙が出てくるんだね」

マーシャは溢れてくるものを、しきりに拭い続ける。

それを気にも止めない様子で、二人は先に馬車へと乗り込んだ。

「おい、嬢ちゃん！ 出発するぞい！」

御者さんが、さすがに痺れを切らして声をかける。

泣きじゃくり、見えづらくなった目をこすりながら
馬車に乗り込むマーシャ。

カナンは少し後悔していた。

そこまで感激してくれるとは思わなかったのだ。

もし馬車を確保してもしなくても、盛大に褒めそやしてやれば、
また頼み事したいときに、気前よくやってくれるからね。

と、スピアにも教えておいたのだが……

二人とも気まずい思いで、正面に座ったマーシャから目をそらした。

馬車はのんびりと山の麓へと走る。

運が良いのか悪いのか、休憩中の二人を追い抜いて。

三人とも朝が早く、疲労もあってか眠ってしまっていた。

乗るつもりがなかったラウンと、馬車を呼び止めようとするリシユレ。

二人で力比べをしていた為、馬車に誰が乗ってるかまで気にする暇はない。

唯一、安全な場所に避難したカエルのみ、

初めて見る大きな動く物体をしげしげと眺めたくらいか。

山の麓にある村にしては、活気がある。

お昼時な為か、そこかしこからする良い匂いに誘われ、リシユレの荒んだ口調が和らいだ。

「アレあるかな！ アレ！」

「絶対ありますわよ！ 見つかりましたら、休憩はそこで決定ですわね」

目を輝かせる少女二人。

疲れた身体を押してでも、食べ物屋をくまなく覗く。

一軒、『アレ』を置いてある店があるにはあった。

白い壁に、間口の広いオープンテラス。

ピンクと白で縞に塗られた日よけに、テーブルクロスもピンク色。

その上には細く白い一輪差しが置かれ、中の花もピンクだ。結構流行ってはいえるようなのだが……

「目が覚めるようなお店ですわね」

「でも、アレはここにしかないみたいだよ？」

いくら女の子でも、殺風景な館に慣れてしまった感覚は、少なからず拒否反応を示す。

「あら～お客さん？ いらっしゃ～い！」

語尾の長く背も高いオネーサンが、恐る恐る近付いて来る二人を見つけてしまった。

「あの、はい。出来れば目立たない場所は空いてませんか？」

逃げられないようにか、痛いくらい二人の腕を掴んで、引っ張り込まれる。

ラウンは、とりあえずオネーサンに悪気はない事を読み取り、店の奥にある席に案内してくれた事に安堵した。

ピンクの髪をしているオネーサンを、見て見ぬ振りをし、ラウンは目当ての物を注文する。

「えと、スペシャルフルーツパフェと、チキンとラズベリーのサンド！」

「私もパフェとサンド同じ物を。後でふわふわショコラケーキのフルコース盛り、

それに、ミルクティーのお砂糖多めでお願い出来ます？」

リシュレの頼み方に、ラウンが皮袋を握りしめた。

文句を言おうと口を開くよりも早く、カエルがポケットから飛び出し、

大きな目をキラキラさせながら叫ぶ。

「命の水！たくさん！たくさん……」

ラウンは慌てて、カエルを掴みポケットに押し込んだ。

オネーサンと二人の間に、気まずい空気が流れる。

他の客はとりあえず気がつかなかったようだ。

オネーサンがキッチンの方を確認し、店長が気付かなかった事に安堵する。

「ホントはね〜ペット持込禁止なんだけどぉ〜」

その子、紅人でしょ？ カエルだけど〜」

「すみません！ 絶対にポケットから出しませんし、あたし達教会の者が監視しますので。お許し願えませんか？」

目を大きくして一瞬黙るオネーサン。

しかし、二人に顔を寄せパツチンと色っぽくウインクした。

「大丈夫よぉ〜？ だってワタシも、紅人だもん！黙っててあ・げ・る！」

色っぽいいし、その仕草もとても似合っではいるのだが……

ラウンが同じように小声で疑問を投げかける。

「なんで、分かったんですか？ ほぼ教会と同じ修道服着ているのに」

「何言ってるの〜！ ワタシもお、館で育ってるのよぉ？修道着を見間違っうワケ、な・い・の！」

「失礼を承知で伺いますけど、あなた男ですわよね？」

ラウンが敢えて聞かないでおいた事を、脈絡もなくリシュレは普通の声で聞いた。

突然の事にラウンは飛び上がるほど驚き、信じられないモノを見る目でリシュレを射抜く。

リシュレはこちらの事など、見てもいなかったが。

しかし、オネーサンは肯定も否定もせず、ただ朗らかに笑った。

「あなたじゃなくて、シュガーちゃんって呼・ん・で？」

シュガーと名乗ったオネ……ニーサンが、ちよんと人差し指でリシュレの鼻を触る。

触られてもいないラウンまでもが、鳥肌に苦しむ。

「二人とも、スペシャルフルーツパフェとチキン・ラズベリー。

ミルクティー砂糖多めでお願いします」

話を逸らすかのように、ラウンが注文をまとめた。

それに対して、リシュレが猛反論を始める。

「シヨコラ盛り合わせが足りなくてよ」

「お金がないんで、それだけで」

「先程の馬車代分があるでしょう」

相手にしないラウンに、怒りを露にするリシュレ。

二人とも、ここは譲れない。

ポケットからも、モゴモゴとアピールしている。

結局は、ラウンが折れる事にはなった。

宿が浮いた分もあるが、自分もミルクティーが飲みたかったものもある。

リシュレが注文した事で、自分も便乗した事を言い返せなかった。

「……はい！ お待ちください」
なにやらメモし、お尻をフリフリ歩いていく。
ピンクの衣装で、丈は短い。

見た目はナイスバディ&美人さんな分、勿体ない気がする。
甘い物メインで売ってる為か、ピンクに彩られているせいか、
男性客は見当たらなない。

シュガーちゃんが、すぐにキッチンから出てきて、
サービスよ。と、水と魚の切れ端をカエル用に置いていつてくれ
た。

とても気が利く彼女（？）だ。
男なのが、やっぱり勿体ない。

しばらく辺りを伺っていると、見覚えのある雰囲気のある三人組が目
に入る。

自分達は奥の席にいる為、相手は気付いていないようだ。
「リシュレ、絶対振り向いちゃダメだよ？ カナン達が外にいる」
「何仰ってますの？ いるわけがないでしょう？」

遠慮なく振り返るリシュレ。
大慌てで諫めようとしたが、遅かった。
いくらなんでも、こんな格好した者が大きく動けば、目に付きや
すい。

案の定、カナンが気付いたようだ。
何事か二人に話し、意を決したようにピンクの店に踏み込んでき

た。

「甘い物につられるらゝって話しとつたら、大正解じゃん」

三人は、隣の席に陣取りメニューを広げだす。

「ラウン達って、何頼んだの？別の頼むから、分けっこしようよ！」
マーシャがメニューを広げたまま、ラウンに押し付けてくる。
それを軽く追い返してから、ラウンが警戒心を露に聞く。

「何でここにいろの？」

「ディリアズ様に頼まれたんだわ。」

あんたらに渡した箱が間違ってたで、交換してきてくれって」

店内は騒々しいほどであつたが、この空間だけ異空間に放り込まれたのではないか？

と思うほどの沈黙がおりた。

その中で、リシュレが最初に口を開く。

「残念ですけど、間違いであれ渡すわけにはいきませんわ。」

誰にも触れさせるなど、厳命されてますもの」

シュガーちゃんが、再度注文を聞きに来てくれ、
彼女（？）が立ち去った後、カナンが顔を寄せ小声で話そうとする。

「あの方は、男性ですわよ」

先手を打って、リシュレが勝ち誇つたように胸を張り、宣言した。

カナンは二度まばたきをして、呆れた声を出す。

何か違和感あると思ったら、左まつげが黒く塗られてるせいかな。

と、ラウンは納得したが。

「どう見てもそうなら。そんなのどうでもええわ」

ラウンは彼女達が本物である事には、看破済みである。

だとしたら、この状況はどうなのだ？

ディリアズ様からの緊急の用なのではないか？

考えの中、違和感が侵食していく。

「いいで、聞きやゝ。私たちは『この箱』を交換する様に言われとるんだわ」

ラウン達が持っている物と、寸分変わらない作りの小箱を机に乗せる。

さすがにスピアが息を飲み、マーシャが声を荒げた。

「ちよつと！ それじゃ試験にならないじゃない！」

「……なに、それ。試験って何？」

ラウンが聞き漏ら巢事なく問い返し、マーシャに視線が集まる。真っ青になって、うつむいてしまうマーシャ。

カナンが溜息を吐いて、話を続ける。

「まあええて。喋っちゃかんって言われとるわけじゃないし。

よく聞きんよ？ これは試験なんだわ。

あんたら二人が、無事送り届けられるか。

もしくは、私らが交換できるか」

「じゃあ、カナン達は敵っていう事？」

ラウンが立ち上がる事なく、つり目を更にきつくする。

立ち上がって逃げるべきか。とも思っただが、まだ何も食べていないのだ。

リシュレも同じ理由だった。別の理由では、まだ足が痛い。

「そう思ってたんだけど、違和感が拭えんのだわ。

だで、あんたらが聞いた話を聞かせてくれん？」

「そっちが先に言えば？スピアには悪いけど、

あたし達はまだ皆を信用出来てない」

カナンは、至極もつともだと頷き、話し始めた。
それを聞き、ラウンもデイリアズの言葉を間違えないように繰り返す。

二人で話をすり合わせていき、最終的には納得のいく物が出来上がった。

その間にも、料理がぞくぞくと運ばれてきては、残り三人がたいらげていく。

悪巧みは、二人に任せておけば後のフォローも安心なのだ。

「……そうだね。とにかく、それしか手はないわけだ」

「こんな簡単でいいのか正直不安だけど。最良だと思うわ」

「じゃあ、イレギュラーがあつた場合は、その都度対応という事で」

二人はがっちり手を組み、はたと気がついた。

頼んだ料理はほぼ完食状態。

ラスト運ばれてきたミルクティー。

カップが皆の分あるという事は、同じように頼んだのだろう。

さすがに怒りが込み上げてくる。

金を払うのは、誰だと思っているのだ！

チキン・ラズベリーサンドのみ残っている。

「甘くない。全然、甘くない」

「足りないでしたら、注文したらいかが？」

ラウンとカナンで半分ずつ分けて食べる事にしたのだが、

ラウンの呻き声に、リシュレは満足そうに答えた。

「そうそう！ 今食べておかなくて、いつ食べれるの？」

マーシャまで冷たいミルクティーを堪能しながら、口を挟む。

カナンがマーシャに告げた。

「マーシャ。あんたが食べた私の分、自腹でよろしくね」

「ええ！？ お金持つてきてないもん！」

「じゃあ、後払いで。断固として取り立てるから」

小さな悲鳴は雑踏に消える。

「リシュレ。あたし、お金ないって言ったよね？」

今後、帰るまで乾パンと水だけだから」

「なっ！？ 横暴ですわ！ 食事は早い者勝ちと決まってるではありませんか！」

ラウンがにっこりと笑う。

「そうだね。でも、その考え方ってば庶民だよ？」

良かったね。庶民に浸れて」

リシュレは、耳まで真っ赤にし大声で叫ぶ。

「侮辱ですわ！ そんなにお金が大事でしたら、

帰ってからいくらでも払って差し上げますわよ！」

「絶対に払って貰うからね！」

「貴族に二言はなくてよ！」

一番質素なのは、カエルなのだが恍惚と机の影で水浴びをしていた。

文句が出なかった分、誰かに気付かれもしなかったが。

さあ、腹ごしらえもそこそこに最後の関門である山登りが始まる。

ラウン・リシュレの試練？～大事な事は何かしら？～（後書き）

あと少しでラストです。
もうひと頑張り！

試験は続き……合格に向けて、努力するぞ……

山の中、独特のざわめきが広がっている。

木洩れ日と、遠く近く響き渡る鳥のさえずり。

山登りにそぐわない格好をした五人の少女達は、

先人達が踏みしめてきて出来た山道を登る。

紅い爪を隠すように、控えめなピンクで塗ってある少女、

マーシャは最後尾から声を上げた。

「やっぱりここは、小箱を争奪しなきゃ試験にならないと思うの！」

四人は答えない。

黙ってる事で、マーシャの気持ちが大きくなるのを防ぐべく、カナンは

上を見上げ、普段より幾分弾んだ声を出す。

「ファークスまで四時間。こんな爽やかなハイキング、久しぶりだよ」

「……スピアも、こんなに楽しいの初めてだよ」

カナンに手を引かれ、振り返って笑うスピアの輝く瞳を見て、マーシャ

は言葉を詰まらせた。

熊避けの為、先頭を歩かされているラウンが振り返って笑う。

「はい！ マーシャの負け」

口を尖らせる姿を見届けてから、ラウンは前に向き直る。

しばらくして、またしてもマーシャは叫んだ。

「試験だって、やるかやられるかだと思っの！」

さすがにカナンが振り返り、

「じゃあなんだん。マーシャ一人で、私とスピアから箱奪って、ラ

ウンと

リシュレの箱と取り替える事が出来るのかん？
四人を敵に回すんなら、いつでも受けて立つに？」

「……………ごめんなさい」

カナンの冷たい視線に耐え切れず、マーシャはうなだれて謝る。
やがて山頂にたどり着き、岩や草の上に各々休憩を取り出す。
ドサツと崩れるように草の上に座り込むリシュレ。
息もあがり、声も出ないほどだ。

ハンカチを敷く余裕もないのだろう、リシュレの疲労を表している。

シュガーちゃんの店で買ったチョコレートを、一口サイズに割り、
ラウン

が皆に配ってやる。

「チョコレートなんて、いつぶりだろうね」

渡されてすぐ口に放り込んだマーシャが、何かを堪えるかのよう
に空を見上げた。

考えが追いつかないただ一人を除いて、しんみりした空気が四人
を包む。

大事に甘さとほろ苦さを味わった後、スピアが恐る恐る手をあげ
た。

「……………スピア、ちょっと考えたんだけど。」

能力を使わないっていうのも試験の内かなあって」

マーシャの駄々コネを、スピアなりに考えたのだろう。

その言葉に、カナンが一理ある。と頷いた。

「そうだわ。それ、絶対あるがね。いかに能力を使わずに突発の出
来事に対応

出来るか。よお気付いたね！ 偉い、スピア！」

諸手をあげて褒めそやすカナンに、スピアが恥ずかしそうにえへと笑う。

考えられる事だけに、ラウンは困ったように腰に着けた麻袋を見た。

カエルを驚かした時と、酒場から逃げる時にネズミに、協力を仰いでいる。

ラウンの能力ではあるが、あの程度なら、普通の人間は気付かなかったろう。

うまく能力を使う事だって、試験の内ではないか？

少しばかり青い顔で、自分に非はない。

能力で人を傷つけたわけではないのだ。と言い聞かせ、スピアの話を自分の
中で無理やり一段落させた。

「さあ、そろそろ休憩終わりにするよ！ さっさと任務終わらせて、
残金を確

認しなきゃだし」

先程の話を振り払うかのように、先を見上げ、わざと明るい声を出す。

普段細かい事に気付かないマーシャが、ラウンの様子に口の端を持ち上げ、

「ラウン？ ひょっとして、使ったんじゃない？ の・う・りょ・
く」

ラウンの肩が、不覚にもビクつくように竦む。

皆から向けられる視線に、呆れと諦めの感情が痛いほど伝わるラウン。

しかし、何でもないかのように振り返った。

「使ったよ。それが何？ 理由はつくんだから、心配する事じゃないよ」

「その理由だけ。聞いたとしてもいいかん？」

眉間を揉みほぐしながら、沈痛な面持ちでカナンが声をかけた。

逡巡するよう見せかけ、渋々といった調子で麻袋を投げてやる。

受け取ったカナンは、なにやら柔らかい麻袋に怪訝な表情を浮かべ、

口を開ける事もなく、マーシャに回した。

「なになに？ くれるの？」

喜々として、ためらいもなく口を開け、マーシャが覗き込む。

脳みそが中身を理解するのに、少しばかり時間がいったのだろう。

カエルが眠たい目で見上げ、マーシャと目が合った瞬間、つんざくような声

が静寂な森に響き渡った。

もちろん、声の主はマーシャで、その声に、カエルが袋の中で腹を見せてしまったが。

放り投げられた麻袋は、そうなるだろうと予想していたラウンが受け止めた。

中を覗くと、腹を見せ硬直しているカエルが、また水分を目から垂れ流している。

ラウンは溜息を吐き、カエルを取り出した。

興味津々、こちらを伺っているカナンとスピアに、見せてやる。

「……ラウン、このカエルって紅人なの？」

スピアがカエルの背中にある3本線に気付き、固い声を出した。

頷いたラウンを横目に、カナンも気付いた事を口にする。

「ひょっとして、コレを助けたわけ？」

「助けたというか、奪い取ってきた。というか……」

苦笑いを浮かべリシュレを見たが、音も風景も見えてない様子で、
ほぼ横に

なっている彼女に声をかけるのはためらわれた。

「まあ、追々話すから。ちょっと気になる事もあるしさ」
仕方なく、それだけ告げる。

気を取り直したカエルは、間近で見つめるスピアに口を開く。

「いじめないで〜いじめないでよ〜」

「……カエルさん、喋れるの!？」

驚きをそのまま表情に乗せるスピアに、ラウンは頷いて返す。

「それが能力みたいだね。スピア、友達になってあげてくれる？
このカエルも能力のせいで、他のカエルとも仲良く出来なくて独
りなんだ」

「……一人ぼっち」

スピアに暗い影が落ち、カエルに手を伸ばす。

麻袋ごと、ラウンはそつと渡してやると、スピアは自分の手に収
まっつい

るカエルを見つめ、囁いた。

「……あなたの、お名前はなあに？」

カエルは意味が分からず、口を開いた。

「命の水〜〜くれるの〜〜？」

隣で見ていたカナンが、苦笑する。

「なんだん。カエルなのに呑んだくれかん」

「……カナン。カエルさんの水といえば、お酒じゃないよ？」
上目遣いでカナンを睨むスピア。

「ごめんなさい」

カナンはスピアの怒った顔に、内心驚きつつも素直に謝った。

スピアが表情に出してまで、怒りを表すのは珍しい。

館に来た当初とは考えられない表情に、申し訳ないながらも少し嬉しい

気もする。

こんな場所のせいもあるかもしれない。

自分達が、スピアに信用されてきているのかもしれない。

とにかく、カナンはスピアの変化に喜びを隠せず、スピアの頭を撫でて
やった。

スピアにとっては、何故撫でられたのか分からなかったが、謝罪
の印な

のだろう。と考える。

「ナマエ……まだ食べてない……」

カエルがのんびりと告げると、スピアは小さく笑い、自分の水筒
から水

をわけてやった。

「……えっと、じゃあ何て呼ばれてたの？」

「ん……？」

首をかしげたカエルに、スピアは思い当たる。

独りで生きてきたのなら、呼ばれる名前がないのかもしれない。
かつての自分のように。

「……カエルさん。スピア、呼び方考えるからあ。仲良くしてね？」

「あああああ~~~~なかよし~~~~いじめない~~~~」
「……スピア、いじめないから」

スピアの瞳に強い光が宿っていた。

自分よりも弱い立場のカエルの責任を持つ事で、はっきりと分かる。

こんなにも皆に見守られ、助けられていた。

「出発、するよ！ これからはずっと一緒なんだから、名前だつてゆっ

くり考えればいいよ」

ラウンが優しく声をかけ、リシュレを起こしてやる。

「こんなお使い。受けるべきではありませんでしたわ」

憔悴しきった顔で、リシュレは下唇を噛みつつ立ち上がった。

「受けなくても、結局試験で追いかけるはめになるんだから。その考えは

意味ないんじゃないかしら？」

さらっと火に油を注ぐマーシャに、怒りの炎が具現化するようにリシュ

レの背後にある木が燃え上がった。

無意識だろう事は固いが、証拠はもちろん見当たらない。

ラウンは、マーシャに号令をかけた。

「マーシャ！ 責任もって消火しな！」

「腑に落ちないけど、ごめんなさい」

口を尖らせると、マーシャは木を指差す。

氷の柱が燃え盛っていた木を包み込んだ。

緑に囲まれた爽やかな山頂に、円柱の氷に閉ざされた、一本の炭の木。

という、違和感極まりない状況が生まれる。

「これは……どう見ても、減点の対象になる、よね？」

ラウンが声を絞り出し、冷気を発するソレからリシュレが顔をしかめて

離れた。

「氷さえ溶ければって、状態でもないし。これで連帯責任は、少し腹が立つわ」

カナンは、内にある怒りを少しばかり外に出して、マーシャの頭をグー

の手でローリングしてやる。

「いたた！ 痛い痛いっ！ なによ、謝ったじゃない」

泣き言を口にするが、スピア以外の皆の雰囲気は最悪だった。

しかし、少々の怒りに燃えたりシュレは、事の外、力がみなぎったようだ。

その勢いがなくなる前に、と、出発する。

出発したのだが、世の中うまくいかないものだ。

下りの前方に、二人の男の姿が見える。

草むらに身体を隠しているようだが、上からだと丸見えだ。

「カナン、怪しい男二人がいるからさ。列変えようか」

ラウンの静かな声に、カナンはマーシャを前に出し、スピアと最後尾に回る。

「スピアは、カエルを守つときんよ？」

「……うん」

カナンがスピアを庇いながら、一つウイंकを送ると、スピアは真剣な顔で

麻袋を胸に抱いた。

移動したのを見届け、近くに動物がいなかラウンが見回そうを
すると、

「おい、待てよ。お嬢ちゃん」

まだ離れた場所にいるはずの野太い男の声が聞こえ、慌ててラウ
ンは振
り向く。

まだ怒りに身を任せたままのリシュレが、先に歩いて行っていた
のだ。

「まずい！ マーシャ！ 着いて来て！」

「えゝ？」

乗り気じゃない声をあげるマーシャが、着いて来ると信じて駆け
出す

ラウン。

背後から、痛いなどと聞こえてきたという事は、カナンが蹴飛ば
したの
かもしれない。

確認してる暇などない。

今のリシュレを、野放しになどしたら、山火事になりかねないの
だ。

現に、リシュレの周りから、ゆらりと立ち込める熱気が伝わって
きている。

「邪魔だというのが、聞こえませんか？」

自分の行く先を邪魔する者は、許さないとばかりに目を細め、眉
毛は怒りに
つり上がっていた。

ヒョロ長い男が楽しそうに口笛を吹く。

「まあ、少しオレ達と遊んでいこうぜ？ お疲れみたいだしなあ」
「なんだったら、荷物持つてやるつかあ？」

スキンヘッドの男も下品に笑い、リシュレの精神を逆なでする。

「あの！ ご、ごめんなさい。連れが何かご迷惑でも……」

「なんだ、カワイイ女が揃ってんじゃねえか」

「イトコ連れてってやるからよ？ こっち来いって」

なんとか暴走前にたどり着き、息を整えながらラウンが先頭に立つ。

男の一人が、ラウンに手を伸ばしたのを見て、さりげなく一步退く。

「ワタクシ達は、神に仕える身。男性に触れては、神の処罰が下つてしまいます」

ラウンは悲しそうに目を伏せ、両手を前に組む。

神など信じていないだろうが、男達は少し怯んだ。

勇気を奮い立たせたスキンヘッドが、口の端を持ち上げる。

「神の処罰なんぞ、下らねえよ。なんたって、人助けだからなあ」

「人助け。ですか？」

ラウンは両手を組んだまま、上目遣いで小首をかしげる。

あくまで純粋な聖職者のイメージで。

それを見て、驚愕の表情で一步退くマーシャの事は、この際放っておく。

「そうそう、人助け！ さすが兄貴い、イイ言葉ですぜ」

「ふふん。そうだろう、そうだろう。おめえもしかり覚えとくん
だな」

「へいっ！」

スキンヘッドが嬉しそうにふんぞり返り、ヒョロ男が揉み手で褒

めそやす。

ああ、こいつらを丸め込むのは簡単かもしれない。
ラウンとカナンは、瞬時にそう判断する。

ラウンは少しうつむき、左手で首からさげている麻紐でくくった
ペンダン

トを握り、右手を背中側に回す。

「そうですか。人助けでしたら、ワタクシに出来る限りお手伝い致しますしょう」

「物分かりいいネエちゃんだ」

いやらしく笑い、スキンヘッドがラウンの左腕を掴む。

うわ！ 手汗すごいよ！ 気持ち悪っ！

という言葉を必死で飲み込み、驚いた表情を作る。

「ワタクシ達に、触れると神の怒りをうけ……」

ラウンの言葉が終わらぬ内に、男達のすぐ隣に生えていた2本の
木が、

一瞬の内に凍りつく。

生木が急速に凍った為、水の膨張に耐え切れず、嫌な音を立てた。

ヒョロ男がスキンヘッドに飛びつき震える。

「ああ！ 神様、お許し下さい！」

悲鳴に近い声をラウンが上げると、スキンヘッド力が緩み、ラウ
ンはまんまと

手汗から逃れた。

「お逃げ下さい、どうぞお逃げ下さい！ 急ぎ、町の教会で許しを
請うのです！」

ラウンが両手を組み、切迫した雰囲気の声をかけてやる。

「あああ兄貴い！」

「おおおお落ち着け！ これは自然の……」

すがりついてくるヒョロ男を、スキンヘッドが押しつけ、なんとかこの状況に

説明をつけようとした。

瞬間、折れて転がっている木の枝やら小石やらが、音もなく宙に漂う。

「神様！ 神様！ ワタクシとこの者達をお許し下さい！」

「逃げて！ 早く私達から、離れて！」

ラウンの天への呼びかけに、マーシャが身振りも激しく、二人を急ぎ立てる。

縮み上がってしまった男達は、その声に従い転がるように山を駆け下りていった。

自分達の進む先だが、彼らはもうラウン達に声をかけるような事はないだろう。

「良かったね。あいつらが普通の人で。紅人だったら、どうしようもなかったよ」

ラウンは安堵の溜息を吐き、振り返る。

この一幕で大分リシュレの怒りは収まってきたらしい。

彼女から立ち上る熱気がなくなっている。

「世の中には、くだらない人間もいますのね。

お父様に似顔絵送りつけてやりますわ」

これで、ヤツらの安息の地はなくなった。

悪い事と分かった上で行うヤツらなど、滅んで当然なのだ。

特に自分達に噛み付くヤツらなど、存在に値せず。

まだ純粋なスピア以外の心は同じ、四人は無言で頷きあう。

「さて、後は下るただで、サクツと終わらせるよ!」

カナンが能力を解除して、声をかけた。

ゆっくりとリシュレも歩き出す。

「……カナン。今のも試験の一部なのかな?」

スピアの呟きに、皆に沈黙がおりた。

そうかもしれない。違うかもしれない。

ただ、乗り越える為の状況判断にしては、合格点ではないだろうか?

ラウンが、重く口を開いた。

「大丈夫だよ。理由はつくんだから」

「つい最近、聞いたセリフなんだけど」

不安な表情を崩せないマーシャ。

苦笑いをしながら、カナンはスピアの頭を撫でた。

「多分、合格点だと思うで、心配せんでも大丈夫だに?」

誰も、絶対とは言えない。

さっきの丸焦げの木から、皆の中で能力を使わない。という気持ちの

リミッターが外れてきている感は否めないが。

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。だいじょうぶ……」

と、皆は少しばかり暗い顔で、呟きながら山をくだった。

陽が西に傾き始める頃、森を抜け、ファークスの町が目前に広がる。

「着いた着いた！ さて、ラウンとリシュレは、ここで待つとりんよ」

「……ゆっくりで、いいよ。ちょっと、休みたいから……」
汗だくで座り込むラウン。

途中で歩くのを放棄したりリシュレを背負い、ここまできたのだ。
体中の筋肉が悲鳴をあげても、仕方あるまい。

「だらしないですわね。鍛え直した方がいいんじゃない？」

当事者であるリシュレは、同じように草の上に腰をおろし、
呆れた口調でラウンに声をかけた。

反論はいくらでも出来るのだが、いかんせん、そんな無駄な体力
と精神力が伴わない。

荒い息を繰り返すのみだ。

「約束して。絶対に、何があっても、町に入らないって！」

カナンは、二人に詰め寄る。

二人が一步でも踏み込めば、カナン組の負けになってしまうのだ。

それ以前に、五人組の試験不合格だ。

基本が『連帯責任』である事を踏まえれば、二組に分かれた所で、
どちらかが不合格ならば、両方とも不合格になるに違いない。

そうカナンとラウンは話し合いの末、結論付けた。

裏を読みすぎているにせよ、どうせ不合格になるのなら、皆でな
った方がよい。

という、スピアの意見により誰からも文句は出なかった。

もちろん、ふくれっ面で渋々頷いたマーシャは、放ったらかしだ
が。

「じゃあ行ってくるで、大人しくしとりんよ」

『はい』

ラウンとリシュレは、すでに動けない。

もし今、山火事が起こったとしても、逃げられないだろう。

「あ、マーシヤは二人の見張り番しとつて」

「ええ〜！ ファーカス初めてだから、私も行きたいのに！」

カナンの言葉に、マーシヤは更に頬を膨らませて抗議した。

ガシツとマーシヤの肩を掴み、カナンは低い声で諭す。

「二人ともこんな状態だに、万が一あの山賊どもと鉢合わせしたら、どうするだん！」

「ええ〜。ラウンの愉快的な仲間達が、きっとなんとかしてくれるわよ」

空を切つて、どنگりがマーシヤのこめかみを直撃する。

「えー！ いたっ！」

マーシヤは顔だけ、飛んできた方向に向けると、木に背中を預け、睨んでいるラウンと目が合った。

「マーシヤ、このまま、陽が暮れでもしたら　酷い事、するからね」

「なによ！ ただごねてみただけじゃない！」

胸を張るマーシヤに、ラウンは第二どنگり弾を構える。

さすがに身を引こうとしたが、カナンはマーシヤの肩を解放しない。

「マーシヤ、無駄に時間を使やあ、

アデレさんを町の外まで連れてくるのは、難しくなるんだわ？

……分かるよね？」

横からは、今にも飛んできそうなどنگり弾。

前からは、肩を握り潰さんばかりに力を込めてくるカナン。

「……ごめんなさい。ここにいます」

マーシャは、そう言わざるをえなかった。

やっとカナンから解放され、二人の傍に座ったマーシャは、膝を抱え、顔をうずめる。

カナンはラウンに頷き、スピアの手を引いてファークスへと乗り込んでいった。

「……マーシャ、かわいそお」

手を引かれたまま、スピアがうつむく。

歩き続けながら、カナンは苦笑した。

「まあ、まだ陽が暮れるまでには、だいぶ時間あるけど。」

もたついとつたら、ラウン達が野宿になるかもしれんしさ？

この場合はしょうがないわ」

スピアも、ああと小さく声を上げ、納得した。

疲れた身体なのに、冷たい地面で一夜をあかすのは、辛い事を知っている。

痛む足を早めて、スピアはカナンについていく。

すでに店じまいを始めている八百屋さん。

忙しそうに働いている、かつぶくの良いおばちゃんに、声をかけてみる。

「あの、すみません。鍛冶屋のアデレさんって、ご存知ですか？」

「はあ？ あんた、誰だい？」

うさんくさそうに二人を見比べ、溜息を吐く。

商売人にあるまじき行為だ。と思ったが、カナンは笑顔を崩さない。

「私は、カナンと申します。こちらはスピア。

鍛冶屋のアデレさんに用事がありました。

その……ちょっと迷ってしまったものですから」

恥ずかしそうに、困ったように笑うカナン。

「ああ……アデレねえ。

なんだいお嬢ちゃんたち、あの男に教会が何の用だい？」

おばちゃんは仕事の手を休めなかったが、とりあえず話は聞いてもらえるらしい。

「お届け物がありました」

「……そうかい。その道を右に折れて、ちょっと歩くと左側にあるよ。

看板が出てなくても、中にはいるはずだから……

ああ、教会の人間が勝手に押し入るなんて、出来ないか。

ちょっと待ってな、片付けてから一緒に行つてやるから」

溜息を吐き、手早く道に出ていた空の箱やら野菜やらを店の奥に運んでいく。

疲れてはいたが、万が一紅人だとバレるのもいかんがたい。

この町が、どれだけ紅人に理解があるか。
分からないから。

「よろしければ、お手伝いします」

「……スピアも、お手伝いします」

二人の申し出に、おばちゃんは目を丸くして振り向き、吹き出した。

「そんな細腕でなにが出来るんだい。

教会の人間はフオークより重い物なんて、持てやしないんだろう？
ほんつと、くだらないよ」

親切そうであるわりに、人当たりがキツイ。

教会と、何かあったのかな？

と思いながらも、カナンは空になった木箱を奥に運ぶ。

教会を装ってはいるが、自分達を軟弱な人間と思われるのは、シヤクに触るのだ。

教会の為でもなんでもなく、自分達の小さなプライドの為、それを見たおばちゃんが、どう感じたかなど知りもしないが、鼻をならし、アゴでそこに置けと指示をしてくれた。

木箱を動かせないスピアは、それでも、手近にあるホウキで店の前を掃くことにした。

一通り片付くと、おばちゃんは気まずい笑みを浮かべ、

「まあ、助かったよ」

と、先に歩き出す。

「旦那さんは、お手伝いしてくださらないのですか？」

「……わたしかい？ まだ未婚だよ。親は先日、亡くなったばかりさ。」

だからって、店を閉じたままなんて出来ないだろう？

なのにあのバカったら、わたしの事、冷たいだの何だの！
「つたく、いかつい顔して引きこもりって、どうなんだい」

溜息を吐くおばちゃん いや、本当はもっと若いのもしれないけど。

カナンは、おばちゃんの後をついていきながら、こっそりスピアと目を見合わせた。

（……おばちゃん、おしゃべり大好きなんだね）

「聞こえてるよ！ まあ、まちがっちゃいないけどね」

おばちゃんの言葉に、スピアは首をすくめ、カナンの袖をギュッ

と握る。

「……あの、ごめんなさい」

縮こまってしまったスピアに、振り返ってまた溜息を吐いた。

「お嬢ちゃん、もつと強くおなりよ？」

そんな事じゃ、生きていくのに疲れちまうよ。

謝るにしても、もつとこう……」

ちらりとカナンを見るおばちゃん。

『？』を浮かべたカナンに並び、左手でカナンの肩を音を立てて叩く。

目をシロクロさせてるカナンに、大きい声で笑いながら、

「あつはつは！ 悪かったね！ と、こう言ってやればいいんだよ」

突然の出来事に、目を丸くしたスピア。

カナンを間に挟んで、おばちゃんは心配そうに伺っているスピアへと、

いたずらつこのように笑い、ウインクを一つ。

「あの、結構痛かったんですけど」

右肩をさすり、それでも一応文句を言っておくカナン。

店を出た時の、シュガーちゃんのウインクよりかは、断然マシな気がしたが。

「だから、悪かったって言っただろう？」

もう一度、左手がカナンの右肩、および背中にヒットする瞬間、カナンは身を翻してやり過ごす。

「同じ手には引っかけりませんてば」

笑い合って遊んでいるかに見える二人に、あ然と見ていたスピアも、

くすりと笑った。

油断していたおばちゃんの背中に、手をポンと当てる。

何かに当たったか？ と振り返るおばちゃんの目には、スピアが映る。

「……ごめんなさい」

ぎこちなく、上目遣いで笑顔を見せるスピアに、

おばちゃんはギュツと抱きしめてやった。

スピアの虜が、またここに一人！

などと、カナンは心の中で熱い友情が生まれるテーマをかき鳴らし、

小さくガッツポーズなど決めた。

「まったく、教会の人間は世間知らずで、素直を履き違えてるヤツばかり

だと思ってたけど、本物もいたとは、知らなかったよ」

今まで、ロクな教会人に合った事がなかったようだ。

ただし、それが本物の教会人なのか、紅人なのかは問題が残るが、とにかくカナンは黙っておいた。

聞くという事は、紅人もこんな格好をしますって事を、バラす事になるから。

試験でよくこの町が使われているようなら、紅人である可能性も高い。

「それは、申し訳ありませんでした。

戻りましたら、よくよく報告させていただきますので」

「そうしといて欲しいわね。

結構、この町の人間で、良く思ってるのは少ないからさ」

カナンは心から申し訳なく言葉をかけ、

おばちゃんがくれぐれも。と付け加える。

ディリアズへの報告事項に、赤でグルグルと囲むほどに、心に刻んだ。

道を曲がり、まだ陽が出ているのに、カーテンを閉めている一軒の前で、おばちゃんは足を止める。

「アデレ！ いるんだろ！ ちょいと入るからね！」
扉を遠慮なしに激しく叩き、鍵はかかっている為、平気な顔で扉を開けた。

「親不孝者めっ！ のこのこと何しに来やがった！」
カナンとスピアも、おそろおそろ覗き込むや、暗がりからダミ声が飛んでくる。

もちろん、おばちゃんも負けてはいなかった。

閉めっぱなしのカーテンを、開けて回り、部屋の片隅でヒザを抱えてい

る無精ヒゲの男が、露となる。

「ろくに掃除もしてないんだろ！」

せめて空気の入れ替えくらいしたらどうなんだい！」

「うるせえっ！ お前の分まで、喪に服してやってんじゃねえか！」

「誰もそんな事、頼んじやいないよ！」

わたしは言っていないよねえ？ そんな事」

いまだヒザを抱えたままのおじさん、アデレは、

見おろす というよりかは見下す感じの おばちゃんに
噛み付くように、言葉を吐き出す。

「あの、アデレさん。ですか？」

「はあ!？」

……ああ、そうだったね。あんたに用事だつてさ!

まったく、またこんな若い娘にウツツを抜かしてんじゃないだろうね」

「ば、バカ言うなよ!

以前のオレは、今のオレには勝てん!」

「……どう勝てないんだい。教えてもらおうじゃないか」

更に冷やか&キツクなる、おばちゃんの間。

しまった。とばかりに、ヒザを抱える手に力がこもるアデレ。

おそらく『以前のオレ』も『今のオレ』も、

どうせおばちゃんには勝てっこないんだで。

余計な口を、挟まんでくれんかやあ。

そんな考えを笑顔に乗せたカナンは、声にも乗せてみようかと本気で思う。

「……カナン、ダメだよ?」

「あら、声に出とった?」

タイムリーに声をかけてきたスパアに、カナンは笑顔のまま振り返った。

困った顔で見つめるスパアは、溜息まじりに、

「……カナン、顔は笑ってるのに、笑ってるように見えないから」

「するどい! 戻ったらチョコを一カケ進呈です!」

「……カナン」

「わかつとります」

口を尖らせながら、逸れがちな話を戻す。

「痴話ゲンカなら、あとでやってくれん?

こっちは日暮れまでに宿も決めにやかんし、

お届け物を預かってる仲間が、町の外で待つとるんだわ」

張り付けた笑顔はそのままに、先程よりも声を張り上げる。
ヒザを抱えていたアデレが、少しばかり腰を浮かせた。

「おい、今なんて言った？

ひよつとして、お前達は西から来たのか！？」

「ええ、そうですとも」

まだ威圧的な笑顔を作ったまま、カナンは頷く。

やっと、話が進みそうだ。

「じゃあ早く出してくれ！

あ、もう用はないだろうから、ジュディは帰れ」

「……はあ！？ あんた何を注文してるのさ！

わたしにも言えないような恥ずかしい代物を、

お嬢ちゃん達に届けさせてんじゃないよ！」

アデレの言い草に、ジュディと呼ばれたおばちゃんが憤慨する。

座っている人間と、立っている人間の間に割って入る違和感を我慢して、

カナンは氣力を振り絞った。

「まあまあ、そんなおかしい物を、私達が頼まれる事はないと思いますよ？

だって、教会人ですし」

「教会人、だって？」

アデレは何度かまばたきをし、あぐりと口を開けた。

有無を言わさぬ笑顔を、アデレに向け頷いてやる。

中身が何であるか、追求はしない。

私達が何者であるかを、気の良いジユディにバラしたら……
とてもとても、大変な状態になる事、うけあいだぞ！

と、そんな長い感情が伝わったのかは、定かではないが、
とりあえずアデレが頷いたという事は、何とか似たような結論に至
ったのだろう。

「そ、そうだった。ツテで巡り巡って頼んだからな。

まさか、教会の人間が自ら来ると思わなかったよ」

「……なんだい、怪しいね。

まあ、わたしには関係ないみたいだし？

アホらしいから、戻るけど。

このお嬢ちゃん達に何かしてみなさいよ、酷い事してやるからね」
そんなジユディの捨て台詞に、アデレは文字通り震え上がった。

「大丈夫ですよ。」

でも、後からちゃんとお礼に伺いますので」

「礼なんていいから、上への報告。

忘れないでちょうだいよ」

カナンに念を押し、スピアの頭を優しく撫でてやって出て行った
ジユディ。

「さあ！ 早く見せてくれ！」

鼻息も荒く、座ったまま手を伸ばすアデレ。

カナンはやりわりと首を振り、

「それが、事情がありまして、町の入り口の仲間が持っているんで
す」

「じゃあ、早く持って来てくれ」

あっさりと手をヒザへと戻すアデレ。

「オレは、ここで喪に服してるんだ。
ここからは動けん。
だから持って来い」

どれだけワガママ親父なのだ。

ラウンと同じくらい、怒りの沸点が低い位置にあるカナンは、
ためらいもなく扉を開け、外に出る。

「ジュディさん！　お願いがあるんですけど〜！」

大声でジュディを呼ぶカナンに、アデレは慌ててやめさせようと
声をかけるが、

喪に服している事への葛藤の為、立ち上がる事が出来ない。

さっきの今で、まだ遠くに行っていなかったジュディが、
血相を変えて飛んでくる。

「なんだい！　やっぱり何かされたんだね！

こんのダメ人間が……天罰など生ぬるい！

わたしがこの手で引導を渡してやる！！」

カナンを押しつけて、家の中に飛び込み、座ったままのアデレへと
掴みかかった。

「あゝ、違うんですけど。

アデレさんに、町の門まで来てほしかったんですよ。

外にいる仲間が、お届け物持ってるものですから」

「……………もっと、説明を、早く……………」

ジュディに、引っ掻かれ張り倒されと、アデレが散々されてから
カナンは口を開いた。

喪が……喪に……とか、まだばやいている結構体格の良いアデレ
を、

ジユデイが引つ張っていく。

「あんたは十分、喪に服してくれて、ありがたいとは思ってる。でもうちの親はね、グチグチと言いつけてるのが大嫌いだったんだよ。」

あんたも、あーだこーだ理由つけてる暇あるんなら、店開けなさいよ。

ただサボってるだけにしか見えないんだからさ」

カナンとスピアは、視線を浴びながら通りを一緒に歩いていく。立つ事を放棄した大の男が、女性に引きずられ図を客観的に見なくても分かる。

恥ずかしい。とても恥ずかしい。

ああ、恥ずかしいという感情は、こんな感じだったんだ！と、どこか別の場所から見てる気がするほど、恥ずかしい。

……ん？ 前にもこんな事があった気がする。

あれ？ 気のせい？ うん、きっと気のせいだわ。

「……カナン？ この間、ラウンと同じ事してたね」

「あゝ！ やっぱリアルと同じに見える？」

スピアの言葉に、カナンは頭を抱えて唸る。

頷くスピアに、カナンは両手を頭からスピアの肩に移し、

「違うでね！ ただ楽しようとしてる、あのダメ男とは違うに？」

私のアレは、ラウンの言葉に打ちのめされて、

立てなかったただけなんだでね？」

必死の形相で説明するカナンに、襟首掴まれて引きずられていくアデレが

ニヤリと笑った。

「仲間だな」

「違うわっ！！ 状況がまるで違う！」
思わず声を荒げてしまったカナン。

しまった。ノってしまった。

周りの目は、カナンにも向けられる。

叫びたくなったが、無理矢理、堪えた。

これ以上、何か言っても不利になるだけだ。

スピアが真面目な顔で、カナンの背中をポンと叩く。

「……カナン、ごめんね？」

「……うん、もういいよ。二度としない、あんな事」

カナンはがっくりと肩を落とし、力なく笑った。

試練は続き……合格に向けて、努力するぞ……（後書き）

いよいよ終盤にきました。

最後まで書ききってしまおうと思いましたが……

長過ぎちゃうかも。と、分ける事になりました。

次話でラスト。がんばります……

試験も終わり、大切なモノは、何かしら？」

「あゝ！ もう、ほんつつとに、疲れたあ！」

草に腰をおろし、背中を木に預け、ラウンは伸びをする。

カナンとスピアを見送った後もなお、ヒザから顔を離さないマーシャ。

「……なによ、なによ。私、間違った事、言っていないじゃない……」
聞こえよがしの言葉に、ラウンが溜息を吐いてから、声をかけた。

「もう、いい加減にしなよ」

「大体、あんな痛い物を平気で投げるなんて、酷いじゃないのよ！ なによアレ！」

マーシャは勢いよく顔を上げ、体操座りのままラウンをにらみつける。

山なりに、茶色のつぶてを放つてやると、マーシャの肩にこつんと当たった。

「ちよつと！ またやつたわね！」

「……あのさ、少しは受け止める素振りくらい見せなよ」

かたくなにヒザから手を離さなかったマーシャには、柔らかく放ったどんぐりが、

またしても攻撃となつたらしい。

ラウンは、呆れる事もあきらめた。

「まあ、マーシャだしね……」

「え？ 私は私でしょ？ 言ってる意味が分からないわ」

渋々、近くに転がった茶色の物体に、手を伸ばすマーシャ。

「今の時期、こんな親指の頭くらいのどんぐり、初めてみたわ」

「そりゃそーだよ。去年の秋から貯め込んでるんだから。」

でも、探せばまだ今の時期なら、見つかると思っけどね？」

探す気はさらさらない為、アゴで森の方を指す。

「えいっ！」

「いたっ！」

……マーシャ。いい加減にしないと、酷い事するから」

油断したラウンに、マーシャが力任せにどんぐりを投げつけた。
肩を押さえて、ラウンは怒りを露にする。

「そんな目したって……怖かったりするんだから。やめてよ」

「言葉がおかしくてよ。マーシャ」

今まで傍観していたリシュレが、呆れた声を出す。

マーシャは口を尖らせて、文句を口の中だけでごまかした。

「マーシャは勝ち負けにこだわりたいんだよね？」

唐突に、ラウンがたずねる。

「うん、当たり前じゃない。ラウンに勝てる機会だもん」

「……それだけの為に？ 皆を犠牲にしてもいいんだ？」

堂々と胸を張り頷くマーシャに、

さすがに呆れたラウンは、言葉をつまらせた。

「他に何があるって言うのよ」

体操座りのまま、ふんぞり返るマーシャ。身体が柔らかい事が証明された。

……あまり意味はないが。

「じゃあ今、頑張ってるカナン達を裏切って、

あたし達がその門くぐってもいいんだよ？」

「その前に、私が奪い取るもん」

「……やってみる？」

軋む体でゆらりと立ち上がるラウン。

「言っとくけど、カナン達が戻って来た時に、あたし達が門をくぐってたら」

全部マーシャのせいにするからね？」

低い、低い声で本気度を示す。

リシュレも仕方なく立ち上がり、修道着をはたき草を落とした。

「ず、ずるくない？ 私だって、カナンに言うから！」

勝手に門をくぐったって。二対一じゃ勝てなかったって言うからね！」

慌てたマーシャは、必死に自分の正当化を主張した。

ラウンもリシュレも、そんな言葉など無視して、門へと足向け
る。

ちらりとも見ず、リシュレが呟く。

「カナンは、どちらの言い分を信用するのかしらね」

「日頃の行いって、大事だよね」

ラウンも痛む足を止めない。

「う、うう。じゃあ入り口を氷で固めれば……」

無駄に能力を使おうとしかけたマーシャに、ラウンは鋭く口笛を吹く。

白い獣が滑空し、マーシャの目の前を塞ぐように、羽ばたいた。

集中力を乱され、マーシャに取り巻き始めていた氷のかけらが霧散する。

大きく美しい羽を持つ白いフクロウが、ラウンの肩にとまった。

羽を膨らませ、鋭い鳴声をあげてマーシャを威嚇する。

「な、なにによなによ！」

「謝らないの？ 本気で終わりにしてあげてもいいけど？」

ラウンは振り返って腕を組み、冷たい目でマーシャを見た。
フクロウも、器用に肩の上で方向転換する。

「……その門くぐったら、皆が試験失敗になるんじゃないかなかったの？」
苦し紛れに、マーシャが言葉を搾り出す。

「うん、そうだけど？ マーシャ、納得出来ないんでしょ？
だから、実践してあげようって思ったんだ。

もし、マーシャの考えが当たっても、結局あたし達の勝ち。
残念だね」

ラウンもフクロウも威嚇しまくっている。

リシュレは、くだらないものに付き合った。とばかりに溜息を吐
き、

元いた場所に腰をおろした。

「結局、悪巧みでは勝てないのですから。早々にあきらめたらいか
が？

悪あがきは、みつともなくてよ」

「だって、悔しいじゃない！」

リシュレに向かって叫ぶマーシャ。

それでも、事態は変わらない。

「何度も説明したと思うけど」

と前置きをしつつ、めんどくさそうにラウンは右手の指を一本ず
つ立ててやる。

「あたし達の『箱』は、アデレさん以外が触ったら、あたし達の失
敗。

あたし達が、そのままファークাসに辿り着いちゃうと、カナン達
の失敗」

フクロウを肩に乗せたまま、ラウンは先程の木によさりかかる。
意外とフクロウが重かった。

「ファークスに入らないようにして、カナン達がここまでアデレさん連れてくる。」

そうすると、ファークスに『着く前に』アデレさんに物を渡せるでしょ?」

重い、重い。

ずるずると座り込みながらも、マーシャに指を突きつけるようにするのはやめない。

「渡してから、カナン達の箱と、アデレさんの『中身を抜いた箱』を交換。」

こうすれば、ファークスに着く前に箱の交換が出来る。
どう? 理にかなってるでしょ?

さて、マーシャに質問です。

これのどこに穴があるのかな?」

悩むマーシャ。認めてしまえば、自分だけが負けた気がする。

それでもなお言い募れば、今度こそラウンは容赦しない気もする。

「でもでも……」

「考えて? 時間はたくさんあるんだから」

頭を抱えてしまったマーシャに、ラウンは言葉を軽く投げしておく。

そう。カナン達が戻ってくるまで、時間はいくらでもある。

余計な考えを持たせない為には、絶好の袋小路だ。

これで、ゆっくりと身体を休められる。

見知らぬおばちゃんと、ズボンに穴が開いたと嘆いているおじさん。

その二人の後を追うように歩いてくるカナン達が来るまでには、十分に疲れも癒されていた。

「仲間って、このお嬢ちゃん達かい？」

おばちゃんがカナンとスピアに大声で問う。

ラウンは　ラウンだけ、といった方が正しいが　立ち上がり、
「ワタクシ、ラウンと申します。」

あの、アデレさんですか？　ここまで来ていただいて、申し訳ありません」

「いやだ、やめとくれよ！　アデレはこっち！　わたしはジユディだよ」

後ろをダラダラ歩いていた男の襟首を掴み、ラウンの前に突き出した。

…… 犯罪者を役所に突き出すみたいだな。

酷い考えも浮かぶが、もちろん口になんて出せない。

これで試験が終わるのだ。

「スピア、カナン。ありがとう。あと、マーシャをお願い出来る？」
柔らかな笑みを浮かべたまま、さりげなくマーシャをけん制しておく。

いまだ頭を抱えているマーシャを、即座に察したカナンが頷き、
ラウンとの間に入る。

人の気配を察知して、フクロウはすでにこの場にはいない。

万が一、強行突破に出ないとも限らないマーシャを、押さえる者が必要なのだ。

「あなたが、アデレさんですか？」

「そうだ。さささっそく『ブツ』を渡してもらおうか」

ヒゲ面のアデレが、ラウンに詰め寄る。

少しだけ後ずさりながらも、アデレに嘘が見られなかった為、

ラウンは荷物の中から箱を取り出した。

「これで、よろしいかと思いますが」

そつと差し出すラウンから、箱を引ったくり、アデレは隠しながら箱の中を覗く。

少し顔をゆがめ、怪訝な顔でラウンを振り返った。

「おい、二つと言っておいたはずだが……」

立ち上がる素振りを見せないリシュレ。

ラウンが小さく溜息を吐き、リシュレに近付く。

「ちよつと、早くアレ渡しちゃってよ」

「イヤですわ」

リシュレの言葉に、ラウンは開いた口が塞がらない。

なんとか気を取り直し、聞きなおす。

「な、なに言ってるのさ。何の為にここまで来たの！」

「あんな不潔極まりない人間に、どうしてこの私が歩み寄らなければならぬのです？」

ミもフタもない。

見ればたしかに、整えられているとは言えないヒゲ。

何故だか埃まみれ、土まみれの服。

こちらからは見えないが、ズボンの尻側には穴が開いてしまっているのだろつ。

ここでリシュレが挫けてしまえば、終わりである。
ラウンは焦りを抑えて、荒げたくなる声も極力抑えて、言葉を返す。

「国を治めていく立場にある人間なら、泰然と構えなきゃダメなんじゃないの？」

あーゆー人間相手に、堂々と王族らしく振舞う為の勉強だよ。
どれだけ蔑んでいても、それをオクビにも出さず、奥ゆかしい態度で事を成すって、
すごい格好良いよね！

こればかりは、真に気高い人間にしか出来ないと思うなあ」

リシュレの痛い所を突く。

しかし、王族が直々に庶民へと手を差し伸べる姿など、見た試しはない。

庶民からしてみれば、天上の者なのだ。

プライドと品格を揺さぶり、リシュレを煽る。あお

ラウンをにらみつけ、それでも苦々しい口調で、リシュレは言葉を吐き出した。

「……仕方ありませんわね。今回ばかりは我慢してさしあげますわ」
リシュレは立ち上がり、丁寧に土と草を払い落とす。
箱を取り出すと、姿勢を正してアデレに差し出した。

「なんだ！ 持ってるなら、早く出さんか！」

一大決心すら踏みにじるように、アデレは奪い取る。
怒りに顔を赤く染めたが、リシュレは王族としての気品を忘れなかった。

ラウンへと振り返り、横に並ぶ。

「リシュレ、頑張ったよ！」

「下々の者がする事ですもの、レベルが低くて当たり前と思えば、何でもありませんわ」

物凄い怒りの感情を見て取った事は、黙っておいた。

言ってもどうにもならない事だ。

彼女は『暴走』を堪えられたのである。ちょっと成長？

またしても中身を確認する際、自分の身体を盾にして隠す。

その様子に、ジュディは呆れて、両手を腰に当てる。

「アデレ。このお嬢ちゃん達に、失礼じゃないか！」

礼くらい言ったらどうなんだい！」

「ああ？ まだいたのか。どうも。もう帰っていいぞ」

一瞥をくれて、アデレは丁寧にフタを閉じた。

失礼だ。失礼極まりない。

それは、五人のみならず、ジュディのつり上がった眉毛を見ても確かなもの。

「あんたがこんなにもサイテーな男だったとは、思いもよらなかったよ！」

ジュディが怒りを込めて、声を出した。

スパアですら、アデレの態度に目を伏せて、カナンの後ろに隠れる。

冷やかな視線と、重く緊迫した雰囲気、アデレはさすがに気がついた。

「な、なんだ、オレがなんかしたか？」

お前らだって、もう用はないだろ？ 何が悪いってんだ」

「あんたね。はるばる届けてもらっというて『もう帰れ』だなんて、

よく言えたもんだね！」

さらに食ってかかるジュディに、

カナンは愁いを帯びた表情でやんわりと声をかける。

「ありがとうございます、ジュディさん。

いいの。そう、いいんです！」

教会の仕事で、こういう言われ方をされるのは、日常ですので「

仕方ないんです。と、そつと目を伏せた。

少しばかり、トゲは残しておく。

頑張つて辿り着いたのに、この仕置きはいただけない。

しかし今は、自分の中にストックしてある悪口雑言を並べ立て、三日くらいは立ち直れないほどの、精神的苦痛を与えるよりも、やらなければならない事が、残っている。

ふう。と、一息つき気持ちを整えて、カナンはもう一度、伏せた目を上げた。

ジュディが、カナンのセリフを聞き、アデレの首を絞めていたが、とりあえず無視をして、言葉を投げかける。

「実は、上の者からの指示で、箱だけこちらの箱と交換して欲しいのです」

「いやだ」

アデレは即答した。

ジュディは絞めた上に、持ち上げる。

「あ・ん・た・ね！ 箱くらい、いいじゃないのさ！」

さすがに、アデレがジュディの腕にペチペチとタップする。

呼吸器系が限界らしい。

少し力を弱めてやると、アデレは咳き込んだ。

「お前、加減って言葉知らんのか！」

「……もっかい、絞め直してやつてもいいんだよ」

ジュディの本気の眼差しに、アデレは齒噛みする。

「しかし……これは、記念なんだ」

「ええ、ええ。そうでしょうとも。」

こんなカワイイ娘達からのプレゼントだものねえ」

ジュディの凍りつきそうな視線は、更に度を越した。

「ち、違う！ 違うんだ！ これは、お前に……」

アデレが、しまったとばかりに言葉を飲み込む。

六人とも先を促すように、沈黙する。

「違う、違うんだ」

しばらくの沈黙の後、アデレは耐え切れなくなって呟いた。

「箱だけでいいんです。交換して下さい。」

こちらの箱の中身も見えていないのですが」

カナンとスピアは、同じような箱を取り出す。

それでも、かたくなに持っている箱を握りしめるアデレ。

カナンが自分の持つ箱を見つめ、ゆっくりアデレに視線を移す。

「箱自体は、同じ材質。同じ大きさです。」

それに、上の者からなんです。箱の交換を指示したのは。

だから絶対に何かあるはずなんです」

「……アデレさん、お願いします。これと、交換して？」

スピアがアデレに近付き、上目遣いで、そつと箱を差し出す。

言い返そうと口を開けたまま、スピアのそれはそれは純粋な瞳を

見下ろし、
敗北した。

深い溜息を吐くアデレ。

状況を見守っていた四人は、同時に心の中でスピアに賞賛を送る。
ジュディはそれを見て、小さく吹き出した。

その場の雰囲気、全部持つてかれたアデレは苦笑する。

「分かった。分かったって！

ただし、中身にもよるからな。

いいか？ 換えるのは、それからだ」

「ケチくさいねえ！

外箱なんて、邪魔になるだけじゃないか。

それくらい、くれてやりなさいよ」

苦し紛れに言うアデレに、ジュディが呆れた声を出した。

そんなジュディに、口の中で文句を言い、スピアから箱を受け取る。
またしても、皆に見られないようになのか、後ろを向く。

箱を開け

「これ、これも付けてくれるのか！」

嬉々として声を上げた後、アデレはしゃがみこんだ。

そんな態度に、その場にいる女性陣は、もちろん興味をそそられる。
後ろから、そっと近付いたのだが、いかんせん床の上を歩くよう

にはいけない。

「来るなっ！」

案の定、土を踏みしめる音を聞かれ、アデレに威嚇される。

そんなに気の長いタイプではないジュディが、さすがに声を張り

上げた。

「あんだね！ 見て下さいと言わんばかりの態度で、その言い方はどうなんだい！

しかも、お嬢ちゃん達に礼もない。

図体ばかりおっさんで、わたしの家族に迷惑ばかりかけて……」
ジュディの剣幕に、さすがにアデレは目を丸くして振り返る。

我慢していた感情が一気に溢れ出し、ジュディの文句はアデレの子供時代にまで遡り始めた。

もはや、本人も何に対して怒っていたのか分からないほど、うつぶんをまき散らしている。

アデレが、つまらなそうに目を細め、

「また始まった」

そんな一言が、ジュディの怒りという炎に油を注ぐ。

「また！？ そんな事言える立場なのかい！」

「ま、まあまあ！ ジュディさん、落ち着いて……」

アデレの服を破りかねない勢いで、ジュディが掴みかかったのを見て、

さすがにカナンが止めに入った。

アデレは掴みかかれた状態で、憤怒の形相をしているジュディを間近で

見つめ、小さく溜息を吐く。

「この状況で、溜息吐くなんて、いい度胸……」

カナンの止めも聞かず、さらにアデレに詰め寄る。

ジュディの目の前に、青いベルベットの生地を使って丁寧に作られた箱が

差し出された。

襟元を解放する事なく、ジュデイが表情はそのままに、うなり声をあげる。

「なんだい、いまさら見せびらかそうって言うのかい！」

「ジュデイにだ」

「物で釣ろうつたって、そうはいかないよ！」

ジュデイの言葉に、アデレは呆れ顔で箱を開けた。

二人の動きが停止する。

ハラハラと状況を見守っていたラウン達。

その著しい変化に、ゆっくりと近付き見てみると、

アデレのごつい手で開けられた箱には、小さく輝く金色の指輪。

「これはっ！」

「いわゆる、アレ？」

一番に静寂を壊したのは、空気を読まないマーシャだった。

我に返ったラウンが、震える声で誰ともなしに呟く。

「間違いないで、アレだわ」

「この様な状況で、ですか？ 庶民の考えは分かりませんわ」

「……カナン、アレって、なあに？」

頷くカナンの服を、控えめに引つ張るスピア。

リシュレの呆れた声に、反論がありすぎて、ラウンは返す言葉が選べない。

「スピア、よく見とくだに？」

参考にしちやかんだけど、これもプロポーズの一種なんだわ」

「……プロポーズ。たくさん種類があるの？」

真剣に聞いてくるスピアに、カナンはにつこりと笑う。

「そうよ。それこそ、人の数ほどね」

その言葉に、ジュディが重い口を開けた。

「な、なんのつもりだい」

「なんのつもりも、コレが出来たら渡そうと思ったんだよ」

まだ怒ったような顔をしているのは、照れ隠しなのだろう。

一言だけ絞り出せたジュディは、この出来事に対応出来ない。
アデレもそれ以上、何も話そうとしない。

（渡そうとって！ そんな言い方ないんじゃない！？）

ラウン、リシュレ、カナン、マーシャの乙女心は一致した。
即座に、ラウンがアデレを。

カナンが放心状態のジュディを、一時的に引き離す。

余計な事だとは、よく分かっている。

分かっているのだが……これは、あまりにも酷すぎる！

「アデレさん、あの言い方はないです！」

「お前らにや関係ないだろ。あいつとの付き合い上、これで通じるんだ」

ラウンは、アデレの言葉に絶句した。

あからさまに冷たい声で、リシュレが罵る。

「これはただの贈り物ですの？ プロポーズですの？

プロポーズの言葉を省略する男なんて、お話になりませんわ」

「何が分かるってんだ！」

アデレの大きな怒鳴り声に、ラウンが覚醒する。

「分かるよ！ 女だもん。分かっても、通じてても、言葉にしてほしいよ！

一生に一度のプロポーズだもん。

アデレさんが、外箱すら記念だと言ったように、

その言葉は、ジュディさんの一生の宝物になるんだから」

「宝は指輪だろう」

惘然と言い放つアデレに、ラウンが齒噛みする。

「……じゃあ言うけど、『コレが出来たら渡そうと思った』って言ったよね」

「そうだったか？」

「そうだよ。」

この言葉だけを聞いたら、ただの贈り物で終わっちゃいますよ？」
「なんでだ」

本気で分からないのだろう。

業を煮やしたりシユレが、アデレに噛み付いた。

「分からない男ですわね！

言わなくても分かるような事でも、言って欲しい時があるのが、今ですわ！ 少しは周りに聞くなりして、勉強したらいいかが？」

「言わないで分かる事を、なんであえて言わなきゃいのかんだ！」

怒鳴り返したアデレに、違う方向から震える声がかかる。

「私は、言ってほしい」

「だから」

アデレは声がした方に顔を向け、言葉を飲み込んだ。

カナンに諭され、自分を取り戻したジュディが、顔を赤くして白いエプロンを握っている。

「分かっても、言っておくれよ。」

それとも、やっぱりただの贈り物かい？」

まっすぐ見つめてくるジュディに、アデレは苦虫を噛み潰したよ

うな顔で
押し黙った。

陽も暮れかけ、重苦しい雰囲気一拍車をかける。
五人は寄り添うように、ジユデイの後ろに移動した。
アデレは、ベルベットの箱を見つめるようにうつむく。

「どうなんだい！」

痺れをきらしたジユデイが、一喝。

静寂に慣れ始めていたアデレは、飛び上がり、

「オレと夫婦になってくれ！」

思わずといった感じではあったが、大事な言葉を引き出せた。
眉をつり上げたまま、ジユデイがアデレに近付く。

腕組みをしたまま、アデレをにらんでいたが、ふと表情を緩める。

「仕方がないね。あんたを放っておけないし。

受けてやるよ」

アデレから指輪を受け取り というよりは、奪い取り 左手

の薬指に
はめた。

ジユデイは少しうつむき、口の中で何事か呟いてから、ラウン達
へと向き直る。

「お嬢ちゃん達、あんなに必死になってくれて、ありがとうね。
ファーカーカスに泊まってくんだろ？ 今日は私の家に泊まっていきな」

「ありがとうございます！」

でも、持ち合わせが少なくて……」

ラウンの言葉に、おばちゃんは豪快に笑う。

「すっかりしてるね。いいよ、今日は特別だよ！
夕食と、明日の朝も付けるから安心おし」

ラウンの背中を力強く叩き、嬉しそうに笑った。

「あ！ その前に、箱を交換して欲しいんですけど！」

カナンが気がついて、アデレを振り返る。

「う。やっぱり記念に……」

「記念は指輪だけで十分だよ！ まあでも、カナン達の箱は残るんだろ？」

前のは返しておやり」

ジューディの言葉に、文句をつけながらもラウンとリシュレに箱を返した。

ラウンが受け取りながらも、疑問をぶつける。

「あの。両方同じ箱なのに、

どうしてコレが、あたし達が渡した方って分かるんですか？」

アデレは目を丸くして、

「何を言っとるんだ。コレクターなら、見分けられて当然だろう」

すごい事だ。到底、真似は出来ない。

しかしラウンは、そんな物か。と頷いた。

「どうして納得出来るのです！ ラウン、あなたおかしくてよ？」

「ああ、友達でそーゆー人がいたからさ。

納得せざるを得ないんだよ。説明は出来ないけど、正しいんだから」

ワケの分からないリシュレが、ラウンに注意を促す。

でもラウンにとっては、こう言うしかない。

説明は出来ないが、過去の経験上、間違いはないだろう。

ラウンの目で見ても、箱は自分達が持っていた物なのかは、カナン達の箱と比べなければ分からない。

とにかく、ラウンとリシュレの箱は戻ってきた。

「じゃあ、後はよろしくね。カナン、スピア」

二人に、渡してやる。

これでとりあえずは、試験の結果待ちという事になるだろう。

「もういいかい？ そろそろ戻るよ」

ジュディが皆に声をかけ、さつさと門をくぐる。

「はい、お世話になります！」

五人は追いかけて、皆が門をくぐり抜けると、ジュディが立ち止まった。

「どうだい？ アデレ。私の生徒達は、意外と優秀だろう？」

振り向きもせず、声をかける。

五人とも不思議そうな顔で、ゆっくりと振り返ると、そこには苦笑いを浮かべているドリユウが立っていた。

「そうですね。少し驚きましたが、合格点は固いんじゃないですか？」

「……ドリユウ様？」

なんとか声を絞り出すラウン。

ドリユウは、仕方なさそうに肩をすくめる。

ぼかんと口を開けたまま、五人は慌ててジュディへと向き直った。そこにいたのは、いつもの優しい眼差しで微笑している、ディリアズ。

「これは、どういう事ですか？」

毅然とディリアズを見据え、リシュレが声を固くする。

気付けば、周囲は木に囲まれ、馬車が通れそうな道が左右にのびている。

先程まであった建物や、住人の姿はなく、ただうつそうとした森が広がっていた。

「試験ですよ。」

「どうです？ 私の演技力も捨てたものではないでしょう」

「楽しげに笑うディリアズに、ドリユウが頭を振り、口を開く。」

「今まで見ていた物は、全て幻だ。」

「君達は知らないだろうが、僕的能力で創り上げた物だよ」

その言葉に、カナンが反論する。

「そんな……おかしいわ！ だって、喋ってる人間だっておったがね！」

「カナン、それは私の能力ですよ」

「ディリアズが声をかけたが、カナンはなおも食い下がった。」

「いいえ！ ディリアズ様。」

「ゴーレムが作れても、話をさせるなんておかしいわ。」

「近くを通ったけど、あんなに人間の雰囲気させてるなんて」

「君達は、まだ僕的能力を過小評価しているようだね。」

「僕は第一級先導士の資格も持っているんだよ？」

「……まあ、なんの因果か。ディリアズの補佐なんてしてるけどね」

「一本の木がグニヤリとゆがんだかと思えば、ジュディが姿を現す。その場から動く事はないが、微笑んだ。」

「さっきは仲を取り持ってくれて、ありがとうね」
声も同じ。

「試しにラウンが、ジュディの腕に触れてみると、肉感があり、柔

らかい。

「……こわっ！」

即座に手を引っ込めたラウンを見計らって、ジュディは木に戻る。改めて触るが、木である事に違いない。

ドリユウは苦笑した。

第一級先導士。それ以上の地位にあるとは、間違っても言えないが、

これくらいは簡単な部類に入る。

物体を創り出せる能力。

それはドリユウが解除しなければ、例えドリユウがこの世からいなくなっても有効なのだ。

生物も創り出せるが、それは幻のみにとどめている。

命を創り出すのは、禁忌であるから。

その部分はゴーレムを使い、自分達を使い、彼女達の目に幻を見せただけ。

「大々的に、詐欺にあつた気分だわ」

「違うよカナン！」

ディリアズ様が、あたし達に詐欺なんてするはずないじゃない！」
カナンの溜息に、ラウンが食ってかかった。

ラウンの目には、揺らぎがない。

「分かったって。じゃあ、上司への報告はなしでいいですか？」

「ええ、構いませんよ」

ジュディと約束したカナンは、少し呆れた声でディリアズに確認

する。

その後ろから、可哀想なくらい真っ青になったスピアが、進み出た。

尋常でないその表情に、ディリアズはスピアの目線に合わせるように

膝をつく。

「スピアさん、顔色が悪いですよ。

やはり無理をさせてしまったようですね」

ディリアズの言葉に、スピアは声を震わせる。

「……ごめんなさい。ごめんなさい。ディリアズ様」

スピアのおかっぱを撫でてやりながら、ディリアズは先の言葉を待つ。

「……背中、叩いてしまいました。スピアは、悪い子供です」

スピアの顔から表情が消え、蒼白なまま、

小さな両手の甲を上にして、差し出した。

マーシャが息をのむ。

初めてディリアズに紹介された時の、スピア。

表情はなく、ミスにもならないミスで謝り、甲を差し出す。

悪い子供には、罰が与えられる。

といわんばかりに。

当時その両手には、痛々しい傷が残っていた。

今では、その傷も完治して綺麗になっているのだが。

ディリアズは両手で、そっとスピアの手を包んだ。

「……ディリアズ様は、親代わりです。手を出してしまいました」
涙はなく、声に抑揚もない。

震える声をしぼりだすように、スピアは言葉を続ける。

その時、狭い袋の中が限界だったのだろう。

口を軽く閉じておいた袋から、白カエルが飛び出した。

「体がかわくよゝいじめないでゝいじめないでよゝ」

重ねたデイリアズ手の上に飛び乗り、カエルはスピアに催促する。

「命の水でいいでゝ水がゝたりないんだわゝ」

「スピアさん、質問します。」

話の途中で割り込むのは、礼儀に反します。

では、このカエルにあなたは罰を与えられますか？」

デイリアズの言葉に息をのみ、それでもスピアは首を横に振った。

あんなに痛くて怖い思いを、小さな 標準よりかは大きめだが

カエルにさせてはいけない。

「……スピアには、できません」

「それは、何故ですか？」

「……痛いし、怖いし……カエルさんは、スピアと同じだから。
カエルさんだけは、あんな思い、させたくないから」

デイリアズがうなずき、自分の手に乗っているカエルを、スピアに返す。

「私達も同じなんですよ。痛くて怖い思いをさせたくありません。

それは、スピアさんが大切だからです。

傷を残すほどの体罰よりも、何が悪かったのか自分で考えて、直せる人間になれるよう、私は教えているつもりです」

ほほえんで、デイリアズは立ち上がった。

「スピアさんは、自分で悪かったと反省しています。これ以上、罰を与える必要などないでしょう？」

大丈夫です。よく考えなさい、顔を上げて周りを見なさい。

スピアさんには、いつだって支えてくれる人がいるのですから」

やっと、スピアの表情がゆがみ、涙が零れ落ちた。

声を張り上げる事もなく、はらはらと大粒の涙が頬を伝う。

「……スピアも、みんなの支えになりたいです」

「何言ってるのよ、もうすでになってるんだからね！」

マーシャが、デイリアズの横にしゃがみ込んで笑い、頭を撫でる。

「あー。感動的な所、悪いんだけど。

馬車が来たから、館に戻るよー」

「……ドリュウ様」

空気を読まないドリュウに、さすがに半眼で見やるカナン。

意に介さず、ドリュウは馬車を呼び止め、スピアを抱き上げた。

あつさりと雰囲気崩されて、少女達は愚痴まじりに馬車へと乗り込む。

馬車の代金をドリュウが支払っているのを確認し、ラウンが最後に乗るんだ。

ゆつくりと動き出した馬車の中、対面式の座席のため、正面に座っている

デイリアズに、ラウンはためらいながらも声をかける。

「あの、デイリアズ様。報告したい事があるんです」

「なんですか？」

「館の下にある町での事なんですけど……」

どこかで監視されていたかもしれないが、マリルの酒場での一幕を話す。

話を聞き終わったディリアズは、思案しながら、
「分かりました。誤解のないよう説明の徹底を呼びかけましょう。
あとでマリルさんに、相応の報酬を渡しておきます」

「あの、それは試験外の事ですよね？」

ラウンが控えめに確認すると、ディリアズはうなずく。

「それで、その。」

先程の白いカエルなんですけど、私達で保護したいんです」

ラウンは、スピアを気にかけて、懇願する。

自分勝手だが、あの白いカエルを、スピアが守る事で、強くなれるかもしれない。

「ダメ、ですか？」

「そんな事ないですよ。帰ったら申請書を提出しましょう」

「ありがとうございます！ ディリアズ様！」

馬車の揺れのせいにして、ディリアズに抱きつきたかったが、さすがに皆の目の前では、恥の方へ天秤が傾いてしまった。

「ふふ、ラウンさんも大きくなりましたね。」

昔なんか嬉しい時は、よく飛びついてきたもんですが」

「あたしも、きっと大人になったんです」

そんなディリアズの言葉に、ラウンは果てしない後悔の念に襲われる。

恥ずかしいなんて、いつ覚えたんだ！ あたし！

心の叫びは、わざと胸を張り答えたセリフに掻き消えた。

館に戻り、陽も暮れて

男ばかりの5人部屋を覗く、ラウン。と廊下で疲労の色を隠さず、溜息を吐くリシュレ。

「よくも男性の私室を覗けますわね。ラウンでないと出来ない芸当ですわ」

「やかましっ！

あ、ちよつと、ジョイル呼んでよ」

リシュレに悪態つきながらも、こちらに気付いた男子に声をかける。

「ああ？ またかよ。

ジョイル！ お前ディリアズ組の連中にまで、コナかけてんじゃねーよ！」

「まったく、女なら本気で誰でもいいのかよ。との、男子生徒の舌打ちに、

ラウンが靴を脱いで背中にぶつける。

「ちよつと？ ジョイルごときに、関わりを持ちたいとも思っていないよ。

ジョイルの婚約者に会ったからさ。報告しとこうと思ったんだ」靴を拾いに、ずかずかと私室関係なく入り込み、胸ぐらを掴む。

「訂、正、して！」

「う、ぐぐう……ごべんださい」

そんなに広くない私室で、呆れたようにジョイルがベッドに座り、声をかけてきた。

「ラウン、どうしたんだい？」

元気の良い女の子は、見ていてすがすがしいけどさ。
ラウン可愛いんだから、やりすぎないようにしなよ」

鳥肌の立つラウン。

廊下に立ち、覗きもしないリシュレは、思わず吹き出しつつも、
『淑女』は我慢。と自分に言い聞かせている。

「私が直々に出向く意味など、ありませんでしたわね」

これ以上聞いていると、リシュレは凍えてしまいそうだった為、
ラウンに言葉をかける事なく、自室へと帰ってしまう。

「そーゆーの、やめてくれる？」

「なにがだい？」

小首をかしげて、歩み寄ってくるジョイル。

ラウンは、一歩退きつつ、大きく息を吸い込んだ。

『ジョイル！ 婚約者のマリルさんにー！ 手紙くらい出さんかい！』

声のでかさには、自信がある。

女子の私室も遠くない為、聞こえないはずはない。

これでチャホヤ度は低下するだろう。

ふーっと息を整え、ジョイルを見れば、みるみるうちに蒼白とな
っていく。

「ラウン、ど、どこでそれを？」

「下町の酒場で、泣いてる彼女。」

こんなに近くににいるのに。あんな、サイテーだよ！

あたし、誰かに詳しく聞かれたら、ちゃんと答えるから」

ラウンの言葉に、うろたえながらジョイルは詰め寄る。

「そ、それはどうだろう！ 妙な噂立てないでくれないか？」

「本人が噂だと思うなら、否定してれば？」

でもね、あたしは体験してきた事を、事細かく話すから。

町へは申請出せば、誰もが行けるよね。皆、すぐに真実だと確信するよ」

ジョイルは、今までに見たこともないほど、表情がゆがんでいる。同室の男子達は、ジョイルの人氣が落とせるのでは？ と期待満面だ。

「ラウン。ボクを脅そうとしても、無駄だよ」

「脅してないよ、真実を話してるだけ。」

あんたみたいのとは、別れた方が、マリルも幸せになれると思うけどね。

でも、あたしはそこまで関与したくないし」

にらみつけてくるジョイルを、真正面からにらみ返し、ラウンは怒りの声をあげる。

「どっちにせよ、婚約者なら、手紙くらい出してやれ！」

ラウンの最初の叫びを聞きつけて、

いつの間にか廊下に人だかりが出来ていた。

同室の男子に、声をかけ、机にレターセットを用意させる。

ジョイルを座らせて、衆人環視の中で手紙を書かせ、封をしたのを見届けてから

手紙を取り上げた。

「お、おい！ 自分で出すから」

慌てた様子で、ラウンから手紙を奪い返そうとするジョイル。

ラウンは取られないようにしながら、皆に質問する。

「ジョイルに渡したら、婚約者のマリルさんに出さずに終わると思う人〜！」

今の様子を見て、満場一致で手があがった。

口の端を持ち上げて、ラウンは不敵に笑う。

「ジョイル。あんたの負けだね」

手紙は明日の朝、町へ行く先導士に直接手渡せば問題ないだろう。集まっていた人ばかりは、ラウンを目の前になると、身をひいて道を作ってくれる。

そんな中、ラウンは一通りの任務が達成した事に安堵し、廊下に出て、

リシュレがない事に舌打ちをした。

疲れたがやっと終わったのだ。

私室に戻れば、チョコレート mountain が待っている。

ラウンは足早になる。

自分がこうしている間にも、どれだけの量が消費されているのだろつ。

信頼？ ええ、してますとも。

でも、ソレとコレとは話が違っじゃない？

その後、ジョイルとマリルさんが、どうなったかは知らない。
あんな逃げ方しておいて、マリルさんに会えるわけもないし。
ましてやジョイルは、この件を境に、目すら合わせなくなっ
た。

でも反省はしてないみたい。

リシュレから、パフェ代ゲット！

今度は一人で食べに行こう。スパアなら連れてってあげても
いいか。

残ったお金は、デイリアズ様に返却。『最初からの約束』だ
ったから。

だったら、もう少しチョコ買ってあげばよかったな。

ラウンの日記

より〜

試験も終わり、大切なモノは、何かしら？（後書き）

紅人の根城。最終話です。

結局、反省をしたのはカナンとスピアだけという……

たくさんの方が読みに来てくださって、とてもとても感謝しきれません。

本当にありがとうございます！ 読んでくださるだけでも嬉しい限りです。

感想いただければ、もっともつと感涙むせびないてしまつかと思います。よろしければ、ぜひ（＜＞）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2138d/>

紅人の根城

2010年10月10日17時39分発行